

# 善光寺への道―『短冊の縁』を読む―

中 野 真麻理

要 旨 『短冊の縁』は物語の舞台を常陸国新治郡を中心に設定しており、詳細な地名や人名が用いられるなど、極めて地域性の濃厚な作品である。本稿ではこれらを検討し、『短冊の縁』成立の背景や成立年代について考察する。



『短冊の縁』は美しい姫君の手遊びに認めた短冊が契機となり、展開してゆく恋物語である。舞台は常陸国新治郡を中心とし、詳細な地名や人名が用いられるなど、極めて地域性の濃厚な作品と言って良い。<sup>(1)</sup>

中ごろのこと、常陸国新治郡の「鼓が峰」に「林左衛門氏頼」という武将が館を構えていた。一族は重代の弓取りの家として栄えていた。四人の子供のうち、末子の高瀬姫は詩歌管弦に秀で、和歌の道にも明るい美姫であった。

ある年の三月、姫は乳母たちと筑波山に参詣した。春爛漫、麓を流れる桜川の風情も一入である。川の白波は桜花と見まごうばかり、心を惹かれた姫君は、薄縹色の短冊にさらさらと歌を書きつけた。

この短冊は、不思議の縁あって下野国に住む「花わ庄次家定」の手に渡った。家定は優れた武将であると同時に、風流を解する美丈夫でもあった。短冊の美しい手跡を一目見ただけで、「見ぬ恋」の虜となってしまう。家定は女房たちの助けを借り、遂に姫と逢うことができた。

姫の美しさは国司の耳にも入るところとなった。早速、国司は姫君に求婚し、事情を知らぬ両親も喜んで承諾した。絶望した姫は一度は自害を決心したが、後の世も憚られて思い留まり、密かに家を出た。彼女が目指した先は信濃国善光寺であった。艱難辛苦の末、姫は「ゆかさく山の稲荷」の託宣を受け、筑波山で信濃国丹波島の住人、齋藤兵衛入道と出会う。姫は入道に伴われて信濃国に無事到着し、大切にかしづかれ、出家の本意も遂げられぬままに日を送った。

一方、氏頼の館は姫の失踪に大騒ぎとなっていた。郎等たちが周囲隈なく搜索したが、姫の行方は全く分からない。

乳母は姫の書置きを見つけ、悲嘆の余り自害してしまふ。

面目を潰された国司は氏頼討伐を計画したが、その災いを防いだのは「ゆかさく山の稲荷」であった。国司は姫に化けた古狐に謀られ、非業の死を遂げる。

他方、下野国では家定が姫を探すべく、館を後にしていた。家定は偶然にも姫を見かけた人物から話を聞き、一縷の望みを抱いて信濃へ下向したのであった。善光寺で家定は大念仏を催し、その噂を耳にした姫は善光寺に参詣した。二人はめでたく再会を果たし、故郷に帰って末永く幸せに暮らしたという。

## 二

二人の主人公を結びつける機縁となったのは、姫君が筑波詣の途次、「桜川」の景色を愛でて詠んだ短冊「さくら川霞のまより　ながむれば　花とうたがふ　瀬々のしらなみ」であった。<sup>③</sup>

この川は謡曲「桜川」にも取り上げられるなど、著名な歌枕でもあった。また、筑波山は古来信仰の名山であると共に、桜の名所としても知られていた。

宝治二年百首落花

後九条内大臣

風吹けば浪もいくへのさくら川　なにながれたるみつのはるかな

〔『夫木和歌抄』巻第四「花」〕

あめつちのもじの歌

順

筑波やま咲ける桜のにほひをば　いかでをらねとよそながらみつ

（同右）

山

従二位行家卿

あしほ山花咲きぬれや筑波ねの そがひにみれば雲ぞたなびく

(同右)

歌苑抄

源経兼朝臣

筑波ねのみねの桜をたづぬとて いく瀬わたりぬたにかはの水

(同書・卷第二十一「嶺」)

正治二年百首

二条院讃岐

照射ともしする比にしなれは筑波山 このもかもぞあらはなりける

(同書・卷第八「照射」)

新統古雜上

前大僧正良珍

筑波ねのこのもかもの山風に かたも定めず散る木の葉かな

(同書・卷第十六「落葉」)

万十四

よみ人しらず

筑波ねの背向にみゆるあしほ山 あしかるとがもさねみえなくに

(同書・卷第二十「山」)

しかし、『短冊の縁』を一読すると、これら周知の靈所旧跡よりも、耳慣れぬ地名や人名が頻出することに興味を惹かれる。

『短冊の縁』冒頭を参照してみたい。

中比、常陸ひたちの国に、林の左衛門氏頼うぢちかといふ人あり、新治にんぱりの郡、つゝみかみねといふ所に、御館みたちをかまへ、久しき

ゆみやの家として、御子三人、おはします、一は小太郎、二は小次郎、三にあたり給ふは、姫君にておはします、

姫君の父、林左衛門氏頼が居を構えていたという「つゝみかみね」は、現茨城県新治郡八郷町の中央に位置する小山の名であると思ふ。(地図)『新編常陸国誌』卷三十「新治郡」の項には向町・金指・柿岡の地名についての記載があり、

いずれも「鼓ヶ峰」に接する場所である。

向町 牟加比麻知 東ハ根小屋村二連り、西ハ鼓ヶ峯ノ麓須釜、加生野二村ノ地ニ錯り、南ハ川又村ニ隣り、北

ハ金指村ニ接ス（中略）、後古名ニ從ヒ、片野村ト改ム、

金指 加奈左志 東ハ恋瀬川ヲ帶ビ、西ハ鼓ヶ峯ニ至リ、南ハ向町村ニ接シ、北ハ柿岡村ニ隣ル、

柿岡 加伎袁加 東ハ上林、浦須ニ村、西ハ上曾、小倉、吉生三村、北ハ宇治会、野田ニ村ニ隣リ、南ハ鼓ヶ峯

ヲ限ル、（中略）又一川小倉村ヨリ来リ、村ノ南方ヲ流ル、コト二十一町ニシテ、金指村ニ入ル、之ヲ由井川ト

云フ、（中略）稻荷明神 長堀坪ニ在リテ、其氏神ナリ、毎年二月初午ヲ祭日トス、

〔新編常陸国誌〕

右のうち、「柿岡」の地には柿岡氏の居城があるなど、鼓ヶ峰一帯は古くから由緒ある地域であつた。<sup>(4)</sup>

「鼓ヶ峰」は標高一三五メートル、通称は富士山、一名を「鼓ヶ峰」と称するといふ（『八郷町誌』第四章第十六節<sup>(5)</sup>）。

『短冊の縁』所見の地名は、概ね、現在の新治郡、筑波山周辺の実際の地名に比定することができる。

例えば、国司が姫君の噂を耳にしたのは「柏崎の六郎貞国」「片野の六郎」「潮来の九郎時真」等との雑談の場であつた。その席で潮来の九郎は、

それがし、さんぬるやよひの末つかた、筑波詣のありしに、道のたよりもよければとて、白滝の明神へ詣でつるに、かの姫も、筑波詣の帰さにや、かの白滝のほとりにて、あたりの人を遠く退け、霞わたれる山々を心静かにながめ給ふ、

（『短冊の縁』）

と語り始め、姫の美しさを称えた。

ここに語られた「白滝」は、筑波山ゆかりの名所であつたと思われる。

○白瀧 此瀧、岩山のそかひをつたへ、或は玉を飛すが如く、或は糸を懸が如く、岩のふしぐに随ひ落る、もよふ様ぐに変わる、白きねり糸を散し、巖の上に掛るに似たれば、土人、白瀧と名付る也、邂逅来り眺る人は、

此風景に帰るを忘る、依て日暮の瀧ともいふ、

〔筑波山名跡志〕

さらに、姫君が失踪した時、「小倉の平次」「片野の六郎」「ほそやの七郎」が大将に任ぜられて、必死の探索が繰り広げられた。この場面にも、具体的かつ詳細な地名が盛り込まれている。

太田川、ほそうち川の落合、いしぶちの流れの末、みつまたかおきといふ入海の底まで、大網おろし、三日三夜たづねけれども、御しがひのあらざれば、さては、虎狼野干の仕業にてもあるやらんと、小倉の平次、かた野の六郎、ほそやの七郎、大将にて、筑波山、このも、かのもの、山つゞき、あしお、かば山、なんたいてう、しらすな、かさかへし、などいふ山／＼を至らぬくまなくとめけれども、御ゆき方なかりけり、

〔短冊の縁〕

ここに見える「いしぶち」もまた、「鼓ヶ峰」や「鬼越山」に近接する地名として今に残る。「石淵」は鬼越山と恋瀬川の接する場所に位置する。ここから先は一面の大沼で、古くは岩壁がそり立つ難所であつたらしい。『八郷町誌』によれば、「大雨ともなると沼の水があふれて、石淵の岩壁から滝となって落ち、実に壮観であつた」と言い、後世、この岩壁が切り開かれたために上流の水が恋瀬川に流れ入り、漸次沼水が退いて良田と化したという伝承があつた。<sup>(6)</sup>〔短冊の縁〕の姫君が入水するには、絶好の場所であらう。

姫君の搜索は水辺ばかりでなく、「筑波山、このも、かのもの、山つゞき、あしお、かば山、なんたいてう、しらすな、かさかへし」などの山々にまで及んだ。筑波山、足尾山、加波山については、ここに余言を費やす必要はないであらう。

「なんたいてう」は「難台城」を指すと考えられる。「しらすな」は「白砂」、「かさかへし」は「風返し峠」、いずれも有名な難所であつたと思われる。

難台山城跡は新治郡と隣接する西茨城郡岩間町上郷に現存する。難台山は男体山、羽梨山とも称した。<sup>(地図2)</sup>標高約五百

五十三米、屏風ヶ岩、舟玉石などの奇石が多く、天然の要害として知られた古戦場であつた。<sup>(7)</sup>

難台山 標高五五三米、八郷の東をかざる山なみの中央。頂上を境として岩間町に接続する嶮山である。元中のむかし、小田五郎、小山若犬丸等がよつて、武家軍に抗した難台山城は東側の岩間地域にあり、西側には戦いについては何もないが、ただ一つ、落城の折り、山頂を越して西側に逃げた婦女子が麓の里におりたとき夜が明けたので、そこにあつた一株の松を有明の松と名づけたとの伝説が残されている。この有明の松は昭和四十一年に県の文化財として指定された。

〔「八郷町誌」第四章第十六節〕

〔「八郷町誌」第四章第十一節「有明の松の由来」〕は、この松樹の伝説をより詳しく伝えている。<sup>(8)</sup>「難台山」については、『新編常陸国誌』巻五十九「山川」の項にも詳細にその位置が記されている。

男体山 用音 茨城郡岩間上郷ニアリ、或ハ難台ニ作ル、此山昔ヨリ羽梨山トモ云リ、東南ハ大洋ニ面シ、愛宕山ニ近接シ、西ハ新治郡瓦谷、中戸、大田ノ諸村ニ跨リ、山頂ヲ界トス、北ハ我国、館岸等ノ諸山重疊シ、加波、足尾ノ連山ト対峙ス、高百九十二丈、頂ニ御嶽祠アリ、山ノ半腹ニ古城址アリ、足利判鑑、箕水漫録等ニ、元中四年小田四郎宗戸南体城ニ據テ兵ヲ拏グトアルハ、此地ナリ、

〔「新編常陸国誌」〕

なお、同書卷七十六「男体故城」によれば、この山城は「山勢險悪、道路詰曲、進退易カラ」ぬ要害の地であつた。次の「しらすな」は未詳であるが、或いは筑波山中の「砂喰」を指すものかも知れない。

砂喰 谷に臨みたる岩山にて、砂喰の所は壁をつたふる如く、手足の便なく、容易至りがたし、岩の中より白砂常に涌出る、人は是を取尽せば、一夜の間に元の如く有り、大山跡神の女、磐長姫は、妹の木花咲耶姫と共に地神第三瓊々杵尊に仕へ、磐長姫は悪女にて御寵愛なく、妹の木花咲耶姫を妃とし給ふ、岩長姫は是を恨み妬みて、終に岩かどを食裂て死す、此神靈砂を喰出すといふ、口蹄の矢告調りがたし、信州浅間山の神と同体也、彼の山、常に



煙立、推て知るべし、

〔筑波山名跡志〕

「かせかへし」は筑波山に連なる峠、「風返し峠」であろう。この峠は筑波山の東麓十三塚からの登山口を登りつめた場所にあり、標高約四〇〇米、新治と筑波の郡界に位置する。（地図）

『八郷町誌』には、風返し峠にまつわる「爺ヶ峰と媼ヶ峰」の伝承が掲載されている。<sup>（9）</sup>

いつの時代であったか筑波山の南につづく尾根の平らな峠道を、遍路の老夫婦が通りかかった。菖蒲沢の薬師に参って、筑波の方へ行くのであったが、日の暮れないうちに宿をとりたい一心で、二人とも疲れた足を引きづって杖をたよりに峠の中ほどにかかった時、わきの木影から眼の前に立ちはだかった大男、一目でそれが「追はぎ」とわかった。追はぎは、杖をふり上げて抵抗する気丈な爺さんをなぐり殺し、路銀と着物を奪い、その間に、息せききって逃げた媼さんを追いかけて風返しの手前で追いつき、之も殺して衣類をはぎ立ち去った。

（第四章第十一節「爺ヶ峰と媼ヶ峰」）

翌日、小幡村の人々は二人の亡骸を見つけ、それぞれ殺害された場所へ懇ろに葬って石の地蔵を建立した。毎年、彼岸には、小幡から僧侶と念仏衆が山へ登り、供養を怠らなかつた。この地蔵は、子授けのみならず病児を守護すると信じられ、遠路はるばる子を背負った夫婦が参詣するほどであったという。「風返し峠」が様々な意味で危険な場所であったことは、古今通じて人々の意識の中にあつたのだろう。

『短冊の縁』では、家臣たちの名もそれぞれ明確に書かれている。それらの姓名は、新治郡の村名と一致するものが少なくない。

例えば、姫君搜索の大将は、先出「小倉の平次」「片野の六郎」「ほそやの七郎」であった。『新編常陸国誌』等には、これらと一致する地名が見出される。

小倉 袁具良 旧下小倉村ト呼ビシヲ、正保、元禄ノ間、下ノ称ヲ除ク、其地東西二面ハ柿岡村、西ハ吉生村、北ハ上曾村ニ界ヒシ、

〔新編常陸国誌〕卷三十「新治郡」

続いて、「細谷」の名も記載が見える。

細谷 保曾夜 須釜、小幡二村ノ南ニ位シ、鬼越、加登、竹山ノ三地ヲ有ス、元禄十五年ノ石高三百八十石八斗九升七合、

〔同書卷三十「新治郡」

片野については、先出『新編常陸国誌』「向町」の項に「西ハ鼓ヶ峯ノ麓須釜」「後古名ニ徒ヒ、片野村ト改ム」とあつて、片野・須釜の地名が見えている。同書卷七十五「故蹟」には「片野故城」を紹介して、

新治郡片野村ニアリ、小田ノ家臣八田将監之ニ居ル、其輩上曾源三郎、皆佐竹ノ為ニ討死ス、上曾ガ妻婦スル所ナシ、片野ノ人憐デ之ヲ養フ、佐竹氏太田三楽ヲコノ城ニ置キ、小田ノ押トス、邑人三楽ニ服セズ、佐竹聞テ上曾嬖妻ヲ三楽ニ妻ス、三楽屢小田氏ト戦テ之ヲ破ル、天正十九年病死、

〔片野故城〕

と伝えている。片野は戦乱の悲劇の記憶がまつわる地であつた。

須釜という名称も、『短冊の縁』に所見の人名であつた。即ち、物語の最終場面において、めでたく姫君を迎えるために参上したのは「すかま八郎」である。

すかまの八郎に、あまたの人をさしそへ、御むかへに参らせ給ふ、

〔短冊の縁〕

この「すかま」には、新治郡小幡の東方「須釜」を当てて差し支えないであらう。

須釜 須賀麻 小幡村ノ東ニ在リテ、其小名ヲ石沢、打出、池袋、下野台ト云フ、弘安太田文ニ、北郡菅間七町三段トアルモノ即是ナリ、元禄十五年ノ石高五百十三石二斗四升三合、

〔新編常陸国誌〕卷三十「新治郡」

さらに、姫君の美しさを国司の耳に入れる場面、同席していたのは「柏崎の六郎貞国」「片野の六郎」「潮来の九郎

時<sup>とき</sup>真<sup>ま</sup>」たちであつたが、この「柏崎」もまた、新治郡の地名である。

柏崎 加志波邪伎 東ハ霞浦ヲ隔テ、浜村ニ対シ、西ハ岩坪村、南ハ田伏村、北ハ安飾村ニ隣リテ、東西八町余、南北二十五町アリ、  
(同書卷三十一「新治郡」)

これらの人名は常陸国新治郡に実在する地名と合致している。とりわけ、『短冊の縁』所見の家臣名の多くが、八郷町内の地名、しかも鼓が峰を囲むような場所に求められることは注意すべきであろう。  
(地図719・12)

八郷町は古くは「田籠郷」「拝師郷」「大幡郷」「夷針郷」「小見郷」「山前郷」にまたがつており、片野は田籠郷に、細谷・須釜は大幡郷に、小倉は夷針郷に属していた(『八郷町誌』第一章第二節)。

そもそも、彼らの主君である「林」の名も、八郷町の地名の中に見出されるものであつた。<sup>(10)</sup>

拝師郷 波也之 倭名鈔云、拝師、按ズルニ、今ノ新治郡上林村、下林村コレナリ、(中略) 拝師ノ名義ハ、即林ナリ、コノ郷ノ郷長居宅ノ辺ノ称ヨリ起シリモノト見ユ、  
(『新編常陸国誌』卷十六「茨城県」)

このように、『短冊の縁』の作者は、極めて意識的に人物の名称や地名を設定している。

### 三

国司との婚礼を拒み、家定への聞こえも憚った姫は、出家を志して密かに信濃善光寺を目指した。慣れぬ道中に姫は疲労困憊し、疲れ果ててまどろんだ。すると、その夢枕に不思議な老翁が立った。

あら、いたはしや候、こよひつゝみがみねを出でさせ給ひて、信濃の方へとうけたまはり、御みちしるべ申さんと、これまで参り候なり、  
(『短冊の縁』)

老翁は姫に向かつて、進むべき道順を詳しく説いて聞かせた。

こよひ明け果て、あくる日は此の所におはしませ、暮に及びて出で給へ、何の恐れもあるまじき、あれに見えたる峰をば、かざかへしと申すなり、あの山のあなたに、美女石と申す名ある石の候ぞや、その石のあたりにて、その夜は明かさせて給ひて、その日もそこにおはしませ、日も暮れ果て、候はゞ、六所の明神へ参らせ給へ、少しもあやぶみ給ふなど、誠に余儀なきけしきにて、涙を流し、申しける、  
〔短冊の縁〕  
姫は夢心地に問うた。

いかなる人にておはします、人けまれなる山中に、こととふものもあらざるに、と涙とともにのたまへば、

（同右）

老翁は一言、「ゆかさく山の麓なる、稻荷の神」と告げ、姿を消した。

夢の告げに任せ、姫はひたすら信濃へ向かつて歩んだ。「白砂」「風返し」などの難所が続いたが、さほど道に迷うこともなかった。「白瀧」の明神を拝み、やがて「めとき原」「美女石」と呼ばれる石のほとりに出た。

そこをば立ち出で給ふて、しらすな、かざかへし、などいふ、恐ろしき山路にかゝらせ給へども、さのみ迷はせ給はず、（中略）しら滝の明神をば、御心ばかりに伏し拝み給ふて、南に向かひて、おりさせ給へば、名にし負ふ、めとき原、美女石の石のほとりにつき給ふ、  
（同右）

『短冊の縁』では引き続き、「めどき」について説明が加えられている。

この原のめどきといふ、草にては、天文の博士とやらんは、物のよしあしをかんがへぬるといへれども、女性の御身なれば、そのわざを知らせ給ふべきにもあらず、

（同右）

このめどきに姫は心願を託し、覚束ない手つきで占を行つて、身の成る果てを知ろうと試みる。<sup>①</sup>

難なく信濃に行きつき、その本意とぐべくは、この草、重にとらせてたび給へ、南無筑波山大権現と、御心のうちに念じ給ひて、御目をふさぎ、とり給へば、重にとりあたらせ給ふ、御夢の告げといひ、又この草のすいゝといひ、一方ならぬ頼もしさに、御涙ながらも慰み給ふて、其夜を明かし給ひける、

(同右)

文中、「めどき」とは所謂「著」「著萩」のことである。古く、その茎は占筮の具として用いられた。

著 蘇敬本草注云著

音戸和名止

以其茎為筮者也、

〔和名抄〕卷二十

Medo メド (著)

迷信的な儀式を行なつて、人の寿命や運命、あるいは、成り行きを占つたり推測したりすること。Medou toru (著を取る) 上のような儀式を行ない、占星家の勘考する占星上の或る点とか線とかを観察しながら、各人の寿命や成り行きを見る、あるいは、推測する。

〔日葡辞書〕「Medo」

『短冊の縁』において「著」が取り上げられたのは偶然ではない。著は筑波山の名産品の一つであつたからである。とりわけ、筑波山東方、亀岳産のものは日本著の名品として珍重された。

著は日本にては常陸筑波山に生凝て亀の甲の形也、眼口手足も亀の形也、此甲に著十三本づつ生ず、高さ三尺計、烟管のらうの太さ也、葉は野菊の様也、此根は芹などの根の様にして、彼甲に生るを亀共に堀て取る也、亀は瓦などの焼たると同じく、急度亀の形也、尤幾所にも生ず、唐にも著の生様如斯、日本にては筑波山也、

〔渡辺幸庵對話〕<sup>(12)</sup>

めど 一名めどぐさ、一名めどぎ、一名めどはぎは、古より西土の著草なりといへり、(中略) さてめどは春旧根より両三茎を生じ、年を経るものは或は十茎、二十茎よりまた四五十茎に至るものまゝあり、其茎高さおほよそ三四尺、極めて細くして直なるものなれば、これを採て筮になすによろし、(中略) 此種は近郊山野にも処々これあるものなれど、旧より大和吉野、丹波亀山、常陸筑波山、山城比叡山、豊前彦山等に産するものを以て名品

とす、歌仙解難抄、和漢三才図会、本草大義、今も筑波山にては此茎を採て簋となし、別に易書を添て、旅人の乞へるものあればあたふるよし、蓋し古の遺法なるべし、

〔古今要覧稿〕卷第三百四十五「著」

著は矢はず草とて、草の中なれども千年へれば木と成て、百本の茎その木一つになる霊木なれば、易に用る木なる故に、草なれどもめど木と云ふ、日本には筑波山より取て用るなり、此著木の出るはめでたき御代のしるしなり、年毎に出る物にはあらず、

〔類聚名物考〕卷二百八十六・和歌故事部三「めどにけづり花さす事」

めど 新撰字鏡、和名抄に著を訓ぜり、今めどはぎといふ是也、(中略) 又齊頭蒿をも簋に用るをもてめどぎともいふ也、筑波山のめど木を用ゐる事もふるし、めどを妻夫の義とし、陰陽の名なるをもて、筑波山の産を用うる成べし、

〔倭訓栞〕「めど」

事実、筑波山麓には「めどぎの原」が存在し、その付近には「夫女石」と呼ばれる霊石も鎮座していた。『筑波山名跡志』の一節、「亀が丘」の項目には、筑波山名産の「著」について言及がある。その直前には、挿絵と共に「夫女石」という奇石に関する記載が見えており、筑波山中には、著の名産地に隣り合つて「夫女石」が実在していた。『短冊の縁』に「美女石」という文字で書きとめられた地名は、まさしくこの「夫女石」であつたに相違ない。恋の道に踏み迷う姫君が占を行うに際し、これほど相応しい場所はないのではなからうか。

○夫女之原 夫女石 筑波町の東に曠々たる原あり、原の離附に方五六丈の奇石二ツあり、其形、男女の並たる如くなれば、夫女石とも、夫婦石とも、陰陽石とも名付、此石に依て夫女□といふ、三里登りて絶頂よりも見ゆる、石の上に各々桜木あり、二木相對して、枝を交ゆ、斯る非情の木石までも陰陽不離の理を顯はす、皆是、二神の神徳なるべし、

○亀が岳 夫女之原の東の方にあり、山の形、亀の甲に肖たるゆへに、亀が岳と名づく、此岳、著の名産にて、

一株百茎の下には、必ず亀ありて負と、依て亀が岳と号すと、一株百茎は希にして得がたし、丹波の亀山と此山とは日本書の名産にて、易家者流の信用するもの也、土人毎年七月七日の夜、是を採り、夫女石の上に晒しもちゆる也、

〔筑波山名跡志〕

『新編常陸国誌』も右と同趣の記事を記し、「コノ岳著ノ名産ナリ」「夫女原ト云、夫女石アルユヘニ名トセルナリ」と解説している。<sup>(13)</sup>

姫は占に違わず、恙無く信濃国に到着した。その助けとなったのは、信濃丹波島から筑波山へ参詣に訪れた齋藤兵衛入道であった。

入道夫婦は子宝に恵まれないことを悲しんでいたが、「一子の無からんを嘆かんより、筑波山へ詣でよ」という霊夢を授かり、参詣を思い立つ。筑波山に着いた入道は先達を頼み、男体、女体の二峰に参り、後生菩提の祈りを捧げた。続いて「いなむら」「あさとく」などの諸社を残る所なく巡拝した。

「いなむら」は『筑波山名跡志』所見の「稲村社」、「あさとく」は「安座常社」を指すものと思う。

○稲村 社 天照太神の御宮なり、岩山の形勢稲を積たるが如し、仍て稲村の嶽と号す、或は伝へいふ、神代神田の稲を積たる所也と、

○安座常 社 素盞雄尊鎮座し給ふ、此社地は地震なし、依て安座常と号す、社の下に宝劔石あり、末社に稲田媛を弁才天と祀り、大巳貴命を大黒天と祭る、日本の大黒天は大巳貴命也、四月霜月御祭礼の時、二神の神輿、此社地に入ず、神輿行掛りて止り、脇道を進み行給ふ、これ日神に仇し給ふ故なりと、尔し神慮測がたし、一国の貴賤皆怪み怖る、

〔筑波山名跡志〕

こうして滞りなく礼拝を済ませたその夜、入道は神主から筑波山の「お座替わり」の由来を教えられた。

十一月朔日より、三月つごもりまで、山の寒からんことをおぼし嘆き給ひて、御子の神たちを、あの、六所のやしろにうつし奉り、御母神、この峰に居替らせ給ふて、すみ給ふ、卯月朔日より、御子の暑からん事を嘆きおぼしめして、御母神、あのやしろにかへりすませ給ふて、御子の神たちを涼しき峰にすませ給ふ、是を御座かはりのまつりと申して、いかめしきまつりの候ぞや、

〔短冊の縁〕

入道は感涙に咽び、その夜は社の回廊に通夜することにした。折しも神官が灯火を掲げに来て、入道に筑波山の由来を語って聞かせる。<sup>(14)</sup>

いまだこの国、はじまらざる以前は、漫々たる大海にて、この御山の八分目まで波を打ち寄する、その所の石をなみつき石とも申し候、又、山の麓<sup>ふもと</sup>迄、波のつきければとて、なみつく山とかきて、筑波山とも申しつたへて候、しうん石、あみだ石、つゞみ石など申、不思議の石の候、たやすく語るべき所にあらず、この六所の明神は、かの筑波山大権現の御母神なりと申しつたえて候、

(同右)

入道はつくづくと思いをめぐらせ、「あはれ、かゝるところへ、美しきちごの来たれかし、男女のさかひは嫌ふまじ、おさへて我が子にせんものを」と願う。

時はあたかも九月十四日、皓々たる月の光の中を、入道の前に十六、七歳の姫君が現れた。これこそ、めどき原を越え、ようやく筑波山の御堂に辿り着いた鼓ヶ峰の姫君であつた。入道はこれぞ仏神の引き合わせと喜び、姫を伴つて信濃へ下向することにした。

越し方行末を思うに付け、道中も涙の乾く暇もない姫君であつたが、桜川を渡つて下野国に入り、宇都宮、日光を経て碓井峠に至つた。この峠を越え、もう筑波山を目にすることはできない。姫君は故郷に別れを告げて、浅間嶽、軽井沢、追分の宿、海野の里、上田、坂本を過ぎ、戸倉の宿に入つた。矢代の明神を拝み、千曲川を越えてよう



やく信濃に着いた。その後、姫君は入道の館で大切にかしづかれて暮らすこととなった。

女房あまたさしそへ、圍繞渴仰、なか／＼主のごとくかしづきける、ありしほどにはなけれども、御心も少しなぐさみ給ふ、姫君のたまひけるは、今一日もはやく、善光寺にまいらせ給ふべきよし、のたまへども、御さまなどをかへさせ給ふべきにやといとおしくて、とやかくやとせしうちに、信濃の国のならひに、かみな月のはじめより、日ごとに霰ふりければ、ほど近き善光寺へ、今日の明日のとせしほどに、あらたまの年立かへり、やよひの比まで、かの入道にやしなはれてあかし暮らさせ給ひける、

〔短冊の縁〕

#### 四

出奔した姫君を救ったのは「ゆかさく山の稲荷」であつた。この稲荷、実は姫の父である氏頼に命を助けられた狐だつたという。

かつて氏頼は、たつか峠、鬼越山、ゆかさく山で鹿狩を行った。その時、家臣が狐の親子を生け捕つて氏頼に奉った。氏頼はこれを見て、

この親狐を殺しなば、子狐もおのづから空しくなるべし、一つの命をとむるといへども、二までにおよぼす、同じ殺生といひながら、余りふびんの事なり、

〔短冊の縁〕

と言ひ、「汝、その恩を報へ」と狐に言い聞かせ、親子ともに放してやった。

やがて、氏頼夫妻に姫君が生まれた。しかし姫は、

三才の秋のころまで、たび／＼おびゑさせ給ふ、さま／＼祈り、加持し給へども、おこたる事なし、

〔同右〕

ある晩、北の方の夢に一人の老翁が現れてこう語った。

我はゆかさく山のほとりに住むものにて候が、先年、氏頼み狩の時、親子二人の命を助けられては候へども、一字の庵を持ち候はねば、守護し奉らん力もなし、神は人の敬ふによつて威を増す物にて候と申捨て、彼の翁は帰ると見えて、御夢は覚めにけり、

(同右)

北の方はすぐに氏頼に夢の話をした。彼も狐の一件を思い出し、早速に社に祀った。

げに、さやうなる事のありしぞやとて、ゆかさく山の麓に祠を建て、祭まつりをはじめ、姫君も参らせ給へば、かのおびえも忽ちにおこたらせ給ひける、その辺にては稲荷の御社とて、今に崇め奉るに、奇特なる事もいちじるし、

(同右)

関東地方には古くから稲荷信仰が普及し、数多の稲荷が祭られている。<sup>(15)</sup>しかし、「ゆかさく稲荷」と推測される社は見当たらない。そもそも、「ゆかさく山」とは何処を指しているのだろうか。

再び、『新編常陸国誌』を繙いてみる。巻五十九「山川」の章に「弓袋山」という項目がある。この山は新治郡小幡村の西、小幡から真壁越えの途中にある。言い伝えによれば付近から温泉が湧き出ていた。そこで「ユブクロ」の地名が付けられ、別名「湯作」「ユガサク」と言われたといふ。<sup>(16)</sup>

小幡から真壁越えの道路のほとり高さ約二五〇米ほどの山中の湯袋部落(中略)、近年つくられた湯袋ダムの辺を拠点として筑波山腹を横ぎり風返しに通る林道が開かれて後、八郷町研修所ができてから俄然有名になった。(中略)平将門が横暴の伯父、平良兼を追って陣を構え、良兼軍を筑波山中に探したというその跡も、また四〇年前の戦国時代の末期、乙畑に出陣した小田天庵氏治軍が真壁道夢勢の鉄砲隊に驚いて敗退したといわれる坂道もこの下の溪谷のほとりであろう。この湯袋の地名は昔ここから人肌位の湯が出たので名づけられたといわれ、

それを裏づけるように湯前、湯沢などの地名がすぐ下にある。（『八郷町誌』第四章第十六節「ゆぶくろ高原」）

『短冊の縁』所見の「ゆかさく山」がこの「ゆぶくろ山」「弓袋山」であることは動かないと思う。（地図13）

弓袋山 由不久呂也麻 新治郡小幡村ノ西ニアリ（古ノ茨城郡）、筑波女体ノ東麓ナリ、山下二人居アリ弓袋新田ト称シテ、小幡村ニ隸ス、傍ニ真壁ヨリ小幡ヘ越ルノ径路アリ、土人伝称ス、コ、ヲユブクロト称スルモノハ、古代是辺ヨリ温泉ヲ出ス、故ニ沢ニ湯泉（ユセジ）、湯作ノ名アリト云フ、  
（ユガサク）

『新編常陸国誌』卷五十九「山川」

さらに『新編常陸国誌』は卷十六においても「弓袋山」の詳細な位置を記載し、この山は筑波山麓の新治郡小幡村、現八郷町内にあり、文禄検地の時に新治郡に配せられたと記している。

大幡郷 於波多 倭名鈔云、大幡、按ズルニ今ノ新治郡小幡村ナリ、土人コレヲオツバタト云、（中略）倭名鈔ト地図トヲ照校スルニ、是郷東ハ田籠郷ニ接シ、西ハ筑波山ノ東麓、弓袋山ニ限リテ、真壁郡ニ隣リ、南ハ筑波郡ノ堺ノ山ニ至リ（今ハ新治、筑波ノ堺）、北ハ夷針郷ト錯シテ、小幡、吉生、細谷（已上ノ三村コレヲ上郷ト称ス、大幡上郷ノ義ト見エタリ）、須釜、上青柳、下青柳、加生野、（中略）弓弦等ノ十六村、六千七百余石ノ地、皆古ノ大幡郷ナリ、コノ郷茨城ノ北郡ニ属ス、土俗館庄ト称ス、文禄検地ノ時、新治郡ニ属セラル、慶長以後ノ制、皆コレニ准ズ、  
（卷十六「茨城郡」）

新治郡小幡村は、筑波山の東麓にあつて「吉生村」と隣り合い、「湯袋」の地名を存していた。

小幡 袁婆多 吉生村ノ南二位シテ、筑波山ノ東麓ニアリ、其小名ヲ十三塚、湯袋、中山、細内、堀之内、上宿、中宿、下宿、横町、稲子、里坪、関下ト云フ、即倭名鈔茨城郡大幡ノ本郷ニテ、弘安太田文ニ、北郡、小幡三町トアルモノ是ナリ、後越幡、押幡、追畑、乙幡ノ文字ヲ用フ、中世藤原氏小田ノ族此地ニ居リ、小幡氏トナル、  
 元禄十五年ノ石高千六百十六石一斗九升、  
（卷三十「新治郡」）

常陸國小幡村の弓袋山、『短冊の縁』に言う「ゆかさく山」は、しばしば戦場にもなった。古くは『将門記』にその名が見える<sup>(17)</sup>。

平将門は女論が一因となって伯父良兼と不仲になった。やがて両者は合戦に及び、良兼軍が常陸国真壁郡に押し寄せる。将門が周辺を焼き払ったため、良兼軍は筑波山など周辺の高山に逃げ込んだ。

然れども将門は、尚伯父と宿世の讎として、彼此相掛す、時に介良兼、因縁あるによりて、常陸国に到り着く、(中略)十九日をもて、常陸国真壁郡に発向す、乃ちかの介の服織の宿より始めて、与力の伴類の舍宅、員のごとく掃ひ焼く、一兩日の間に件の敵を追ひ尋ぬるに、皆高き山に隠れて、ありながら相はず、逗留の程に、筑波山にありと聞く、二十三日をもて、員のごとく立ち出づ、実によて、件の敵、弓袋の山の南の谿より、遙に千余人の声聞ゆ、

(『将門記』)

『新編常陸国誌』は「彼弓袋山ハ筑波山ノ東北ノ麓ニアリテ、真壁郡ニ接ス、新治ノ石田トハ其間近カラズ」(卷二十二)と解説している。良兼軍は真壁郡に程近い「弓袋山」から起死回生を狙い、関の声を挙げたのだった。

下って室町末期、常陸国は信太郡を小田城主である小田氏治(天庵)が、真壁郡は真壁氏治(道無)がそれぞれ治めていた。両者は多年に亘る勢力争いを続けていたが、元亀四年(一五七三)四月、遂に合戦に及ぶ。

『常陽四戦記』によれば、小田氏が筑波山に連なる青柳山を越え、真壁と山一つ隔てた「新治郡小幡村」まで侵入した。これを受けて、真壁氏は即刻、出陣した。小田軍は真壁の西口から来襲するという情報であったが、「敵は小幡にあり」と注進が届く。真壁軍は急遽、山手へ回って小幡に進軍、真壁氏の聲である梶原源太資晴、その父太田三楽齋らも援軍に駆け付けた。しかし、小田軍は大変手強く、苦戦を強いられる。

ナカ／＼対当スベキ敵ナラネバ、小幡ノ近辺ニ、要害無双ノ古屋形有シニ取入、敵引ハ突テ出、敵返セバ彼屋敷

へ引入、カクノ如クスル事数回ニシテ、時刻ヲ移ス所ニ、道無ガ勢、ユブクロ山ヲ越来、其旗本見ヘケレバ、天庵、三楽父子ヲ捨、真壁勢ニ向テ備ヲ立、小幡ノ地形、三方ハ山統テ、中ノ平地ノ纔十町足ザル狭キ所ナリ、小田勢是ニ充滿ナリ、

〔常陽四戦記〕

真壁軍は「弓袋山」山上から小田軍に襲い掛かった。激しい戦闘の結果、小田軍は敗北し、小田城は三楽齋父子に固められてしまう。父子は秀吉の小田原攻めまで小田城に在城した。

この戦闘については『新編常陸国誌』（巻五十九・山川「弓袋山」）も言及して、「ユブクロ山」は「弓袋山」「湯作山」のことであると述べている。

これらの例は、「ゆかさく山」が古来の要害であったことを良く示している。『短冊の縁』の林氏頼が「ゆかさく山」の地に稲荷を祀ったのは、館を守る稲荷、所謂「城山稲荷」としての性格を付与していたものと解釈できる。<sup>(18)</sup>

果たして、「ゆかさく山の稲荷」は姫君の苦難を救ったばかりでなく、主君である氏頼の身代わりとなってその恩に報いた。

姫君が筑波山に到着した頃、氏頼は重大な危機に直面していた。姫君失踪を知った国司が激怒し、潮来九郎時真に氏頼討伐を命じたのである。鼓が峰攻めは九月十九日と決定した。

奇しくも姫と入道が出会った九月十四日、国司は氏頼方の様子を探るため、小鷹狩を催した。里人に付近の地理を尋ねると、

あれこそ、たつかとうげと申して、鳥もかけりがたき所にて候、あの山の頂に、大きな岩穴<sup>いわあな</sup>あつて、龍神<sup>りゅうじん</sup>、是にすませ給ふ、げにまことや、一年に一度か、二年に一度は、かの穴のほとりより、黒雲うづまき出、雨を降らし申す事、世の常ならず、

（『短冊の縁』）

と語り始めた。

ところが、話も終わらぬうちに国司秘蔵の鷹が反れてしまった。家臣たちが懸命に搜索していると、とある枯木のあたりに人の気配がした。下僕を遣わして様子を窺わせたところ、彼は血相を変えて馳せ帰った。

あの木の本に、年のほど、十六、七ばかりの女房、何と言葉に述べがたきが、たゞ一人候、たゞ人にてはよもあらじ、この山の頂なるたつか峠の龍神の、人を取らんはかりごとに、女と変じ給へるか、もしさなくば、ゆかさく山の麓なる、稲荷のやしらの眷属が人をたばらかさんと化けたるにてや候らん、日頃も此山にてはあやしき物の候ぞや、

〔短冊の縁〕

これを聞いた国司の童「鬼若」は「それがし参りて見て参らん」と勇み立ち、山路を急いだ。

九月十四日の月は澄み渡り、辺りは静まり返っている。木の根元には、確かに人の気配がした。鬼若の誰何に対し、のどやかな女の声が答えて、

いたうな、さはぎ給ひそとよ、是は林の氏頼が姫なるぞや、国司に逢ひ奉りて、物一言、聞へんために是迄迷ひ出でけれども、さすがに人目も恥づかしくて、この山中に隠れ伏し、いやしき本草のみに露の命をかけて候へども、いかにとしてか、かくと知らせ奉るべきたよりもなければ、心ひとつに嘆き暮らせし所に、御内の人ぞと聞き候へば、ありがたふこそ候へ、

（同右）

と嘆き暮らした日々を語った。鬼若は太刀を引き抜いて女に迫った。

かく恐ろしき山中に、まして女の身として一人のみありけるは、是非につけておぼつかなし、野干の変化とおぼへたり、急ひで姿をあらはせよ、深く陳づる物ならば、我ばし、恨み給ふな、

（同右）

しかし、姫は動じる気配もない。万一、本物の姫君であつたならば、迂闊に殺傷することはできない。鬼若は用心

しながら彼女を国司の館へ連れ帰った。

国司は那須野の原の殺生石の故事などとも思い合わせて躊躇したが、恋情断ち難く、姫を妻に迎えた。この上は、下野国の家定に知られる前に都へ戻らねばならない。物に憑かれたように、国司は上洛の途に着いた。

一行が駿河国の清見が関に到着したのは、月も無い九月二十日余りのことであつた。彼らは遊女を呼んで今様を歌わせ、様々の興ある遊びを尽した。

その夜、国司の宿に賊が押し入った。国司は「夜討ちの入りたるは」と鬼若を呼び、家臣の者たちも駆けつけた。国司方の怒号に敵が嘲笑して答える。

夜討ちの中より、さすが京げの物よ、軍の法をば知らざるや、夜討ちに入る者の、名字を名乗る法やはある、と、ときの声にはあらずして、数千人の声として、一度にどつとぞ笑ひける、

〔短冊の縁〕

周囲を見渡すと、数多の敵が海から押し寄せているではないか。

船にてもかたき寄するとおぼしくて、田子の入海ほかさきまで、船にともせる篝火は、幾千万といふ数を知らず、

(同右)

驚愕した鬼若は広庭に踊り降り、山の方角を見上げた。赤々と燃える松明の数は、海の上より夥しい。鬼若は涙ながらに国司の前に参上し、「海山よりもかたき寄すると見えて、灯しつれたる松明は、たゞ日中のごとくにて候」と言上した。

進退窮まった国司は、最期を覚悟して姫君に別れを告げた。姫は、

是は一定、花はの庄次にてあるべきに、父母の命をも背き、人の嘲りをも知らず顔にて逃げ隠れて来たりし甲斐もなく、又よの人に見ゆべきうき身かは、忘るまじ、忘らるまじとこそ契りし物を、早くもかはらせ給ふ御心の

恨めしさよ、後に残しおき給ふては、御心にかけてせ給ふ事もやるべき、人は今はのきはの一念にて、よき所へもゆき、あしき道にも落つると聞く物を、まづ、みづからが有様を見給ふてのち、御心やすくともかくもならせ給へ、

〔短冊の縁〕

と言うや否や、守り刀で胸を貫き、国司の膝にすがつて空しくなった。国司もすぐにその後を追った。獅子奮迅の働きをした鬼若も、腹十文字に掻き切つて果てた。

翌朝、何も知らぬ侍たちが出仕すると、鬼若はじめ、二十余人の者たちが前後不覚に伏している。宿の主人も不審がり、「宵よりも静かにして、人のおとなひだにも候はず」と首をかしげる。やがて倒れていた人々も正気づき、国司の身を案じて駆けつけた。

無残にも、国司は切腹して事切れていた。人々は涙に暮れながら、姫君の上衣を引きのけた。

姫君にてはましまさで、幾千歳をか送りけん、古狐にてぞありける、人くは是を見て、あらくちおしや、姫君と思ひしはこの狐にてありける物を、知らざりけるこそ、くちおしけれと、あきればてたるばかりなり、

〔短冊の縁〕

国司自害の一件は、

氏頼、不慮の難にて身を滅ぼさんとせしに、かの狐、いにしへの恩を報ゐんために、氏頼の息女と化し、国司の御心をとろかし、忽ちに命を滅ぼす、

(同右)

と語り収められている。

文中、姫君の発見された場所が、「たつか峠」と呼ばれる「頂に龍神の住ませ給」うた山だという点に注意しておきたい。この峠は「龍が峠」の意であつたかと推測する。



かつて氏頼は、「たつか峠」「おにこえ山」「ゆかさく山」で狩を行っていた。これらは「ゆかさく山」近辺に実在の地名を引いていると推測される。

「ゆかさく山」に近く、龍神が住む山と言え、龍神山」を挙げるべきであろう。この山は石岡市と八郷町の境界にある（『八郷町誌』第四章第十一節）。龍神山の付近には「竜ノ口」の地名も残っている。<sup>（地図14・15）</sup>

もう一方の「鬼越山」とは、龍神山付近の深林地帯を指している。<sup>（地図16）</sup>この山は石岡方面から「龍神山」の下を通り、

「波付石」に出て、根小屋へ越えて行く地域一帯の深林を指していた。往時、府中茨木で誕生した茨木童子がこの山を越えて大江山に行き、酒吞童子の手下になったので、「鬼越山」と呼ぶようになったという言い伝えがある。一説には、竜神山の南を流れる恋瀬川に橋がなかった頃、府中方面から筑波山近辺に向かう場合は、身分ある人々は「鬼越山」を通過した。彼らの荷物を馬に積んで行ったために「お荷越え」と称したともいう。「鬼越山」は昭和四十年代に入ってから、「老樹路を覆って昼尚暗い」場所であった（『八郷町誌』第四章第十六節「鬼越山」）。

「鬼越山」の標高はさほど高くなかったらしく、『新編常陸国誌』も「山高カラズトイヘドモ幽僻ノ地ナリ」と評している。

鬼越山 於爾古江也満 新治郡染谷村ト根小屋ノ間ニアリ、山高カラズトイヘドモ、幽僻ノ地ナリ、府中税所文書、延元々年ノ讓狀ニ、鬼越ニ在家一所トアリ、其名ノ久シキヲ見ルベシ、土人ノ説ニ、大江山酒吞童子ノ眷属茨城童子ハ是地ノ産ナリ、コノ山ヲ越テ丹後国ニ赴ク、故ニコノ名アリト云ヘリ、笑ベシ、或ハ云ク、コノ山岩洞多シ、往古鬼類ノ栖タル所ト云フ、但コノ地古ノ茨城郡ノ内ニシテ、茨城郷ニ接セリ、（茨城郷ハ今ノ府中ノ地）、茨城童子ノ説コレヨリ起レルナリ、按ニ鬼越ノ称、所々ニアリ、武州秩父山ノ辺ニ鬼越山アリ、嶮難ノ地ニアラズ、高山ニモアラズ、出羽国山形ヨリ二里半ホド坤ニ、鬼越山アリ、（松原自休手録ニ見ユ）、又下総国葛

飾郡中山村ノ辺ニ鬼越村アリ、補、事蹟雜纂云、土俗ノ説ニ、コノ山所々ニ大ナル岩洞多シ、昔コノ洞ニ賊多ク  
スミテ、財ヲ奪ヒ人ヲ殺シナドシテ、放蕩無慚ナリシカバ、時ノ主之ヲハカリテ、岩洞ノ口々コトトク茨荊ヲ  
積テ、之ニ火ヲカケシカバ、鬼悉ク爛死ス、故ニコノ処ヲ鬼越山ト云ナリ、

(卷五十九「山川」)

竜が住み、鬼が跳梁する異界の地、国司の竜が「鬼若」という名前であることも故なしとしない。

しかし、狐の化した姫君が「ゆかさく山」そのものではなく、「竜神山」に姿を現したのは何故か。

稲荷と龍蛇の関わりを伺わせる説話は、諸書に散見する。例えば『溪嵐拾葉集』には、財を乞うて江ノ島弁才天に  
参籠した上人の前に「狐子」が姿を現す。<sup>(19)</sup>

一 良観上人福神勸請事 上人存生ノ時、如意宝珠ヲ乞テ衆僧ヲ可扶持トテ、江島龍穴ヘ七日被籠ケリ、七日行  
法之間、壇上ニ狐子ヲ三ツ出現ス、此感得シ給テ帰寺之後、一ヲバ極樂寺ノ方丈ノ下ニ埋シ、一ヲバ多宝寺ニ埋  
シ、一ヲバ三村ニ埋給ヘリ、仍彼三ヶ処寺繁昌シ給リ、但シ極樂寺長老入滅以後、第二長老彼ノ方丈ヲ取りクツ  
シテ被造作ケル之時、地ヲ引ケレバ、其地ヨリ白蛇ヲ引出テ、中々打切タリケリ、故ニ老僧共無勿体事セラルル  
由申ケリ、其故ニ彼寺無程炎有、俗諦事ニモ不足ニ成ケリ、如此最初興隆上人置事ヲバ不可動事也云云、私云、  
彼狐子變成白蛇、是ニ臂神王法ヲ修シ給歟、宇賀刀自女経ノ説也云云、

(『溪嵐拾葉集』卷第三十八)

『平家物語』卷七所見の経正の説話も、人々に周知のものであった。

平ノ清盛、蓮台野にて狐にあひし、同経正、竹生島にて琵琶を引し時、白狐出たり、狐寿八百歳、三百歳變為人  
也と抱朴子に有、狐は鬍髯をいただきて北斗を拝し、落ちざれば化して人となると也、狐を妻として三年狐と知  
らざりしは孫巖といひし者也、

(『俳諧類船集』「狐」)

これらは、蛇を使令とする弁才天の因縁譚に「狐」が登場する例である。

東寺親智院所藏賢宝自筆本『稻荷流記』（親応頃写、一卷）を参照してみたい。<sup>(20)</sup>ここに、荷田氏の祖先「龍頭太」に関する説話が収められている。龍頭太は稻荷山の山神であり、龍さながらの容貌をしていたという。

#### 龍頭太事

或記云、古老伝云、龍頭太ハ和銅年中ヨリ以来タ、既二百年ニ及ブマデ、当山ノ麓<sup>フモト</sup>ニイホリヲ結テ、昼ハ田ヲ耕シ、夜ハ薪ヲコルヲ業トス、其ノ面龍ノ如シ、顔ノ上ニ光アリテ、夜ヲ照ス事、昼ニ似リ、人是ヲ龍頭太ト名ク、其ノ姓ヲ荷田氏ト云フ、稻ヲ荷ケル故ナリ、然ニ弘仁ノ比ニ哉、弘法大師、此ノ山ヲトシテ難行苦行シ給ケルニ、彼ノ翁来テ申テ曰ク、我ハ是当所ノ山神也、仏法ヲ護持スベキ誓願アリ、願ハ大徳、常ニ真密ノ法味ヲ授ケ給フベシ、然者愚老忽ニ応化ノ威光ヲ輝テ、長ク垂迹ノ靈地ヲカザリテ、鎮ニ弘法ノ練宇ヲ守ルベシト、大師專服膺セシメ給テ、深ク敬ヲ致シ給フ、是以其ノ面顔ヲ写テ彼ノ神体トス、種々ノ利物連々ニ断絶スル事ナシ、彼ノ大師御作ノ面ハ、当社ノ竈戸殿ニ安置セラル、毎年祭礼ノ時、神輿相共ニ出シタテマツル、仍当社ニ荷田ノ社トテ鎮坐シマシマスハ、彼ノ杜壇也、今ノ神官、肥前々司荷田ノ延種ハ、龍頭太ノ余胤也、  
〔稲荷流記〕  
稻荷と龍蛇との密接な関係は、早く伏見稻荷に定着していた。『短冊の縁』の「ゆかさく山の稻荷」が竜神の住まう山に姿を見せるのは、こうした連想に基づく設定ではなかったか。

#### 五

国司自害に至るまでの記述には、随所に稻荷や狐に対する意識が働いている。姫君を発見した家来は、「ゆかさく山の麓なる稻荷の社の眷属」かと恐れ、鬼若は「野干の変化」であろうと疑った。日中さながらに点された松明は狐

火を暗示する常套表現であるし、下野那須野の殺生石説話も引き合いに出されている。

しかし、「ゆかさく山」の靈力ある狐の説話は、もう一つの有名な伝承を想起させずにはおかぬ。それはかの安倍晴明にまつわる説話である。<sup>(21)</sup>『簞篋抄』の一節、吉備大臣が定命を全うし、金鳥玉兔集を伝授せんと思うくだりを引用する。

今マデノ存命ハ、誠ニ安部ノ仲丸ニ依テ也、大唐武帝ヨリ給ル金鳥玉兔集、今ノ代ニヒロメズ、是レヲ仲丸ガ子孫ニ譲相伝シタシト思フニ、仲丸子孫、今、関東常陸之國、筑波根之麓ニ吉生ト云処ニモアリ、又眞壁猫島ト云処ニ有ル義ヲ聞ク、彼レニ至リ、漸ク吉生ニ近ヅキ、筑波ノ麓ニ体居シ給ニ、其ノ村ニ六ツ七ツ計リノ童子十二、三人有リ、遊中ニ一人ノ童子ニ天ヨリ天蓋下テ彼レニ覆故ニ、吉備大臣、不思議ニ思ヒ、或ル老翁ニ問ヒ給フ、老人答ヘテ云ク、アレコソ先年入唐セシ仲丸ガ子孫也ト申ス、其ノ儘、吉備大臣、彼ノ童子ノ住処ヲ尋ネ給ヒ、此ノ書ヲ譲給フトイエドモ、童子幼少ノ故ニ、無相伝、正本計リ渡シ給也ト云云、（寛永六年版『簞篋抄』）

安部仲丸の子孫が住んでいた「吉生」はまさに新治郡内、しかも小幡村の隣に当たっており、現在の八郷町内に位置する。「ゆかさく山」とは直線距離にして約一・五軒、指呼の間にあると言つて良い。<sup>(地図17)</sup>

吉生 与志布 小倉村ノ西ニアリテ、其小名ヲ上根、辻、笛田、瓜谷ト云フ、

（『新編常陸国誌』 卷三十「新治郡」）

『簞篋抄』には、安部晴明の母狐は「猫島」の産であつたとも伝えている。

或ル時、其ノ末孫、仁王七十四代鳥羽院ノ御時代ヨリ叡山ノ坂本ニ登テ居住スト云、生國ハ筑波根ノ麓、猫嶋ノ生ノ人カト云、権化再來ノ人ハ何レモ生國不定也、彼ノ清明ガ母ハ化來ノ人也、遊女往來ノ者ト成リ往行シ給フヲ、猫嶋ニテ或ル人ニ被レ留、三年滞留有ル間ニ、今ノ清明誕生有、既ニ童子三歳ノ暮、歌ヲ一首連ネ給テ曰

ク、戀<sup>コヒシ</sup>クハ尋<sup>タツ</sup>ネ來<sup>キ</sup>テ見<sup>ミ</sup>ヨ和泉<sup>イヅミ</sup>ナルシノダノ森<sup>モリ</sup>ノウラミ葛<sup>クツ</sup>ノ葉<sup>ハ</sup>ト讀<sup>ヨミ</sup>給<sup>タマフ</sup>テ、搔<sup>カキス</sup>消<sup>シヤス</sup>樣<sup>ヤウ</sup>ニ失<sup>ウセ</sup>ニケリ、故<sup>ユヘ</sup>ニ清明<sup>セイメイ</sup>上落<sup>ジョウラク</sup>ノ砌<sup>セキ</sup>リ、先<sup>マツ</sup>ツ母<sup>ハハ</sup>ノ讀<sup>ヨミ</sup>置<sup>ケ</sup>シ歌<sup>カ</sup>ヲ如何<sup>イカニ</sup>ト思<sup>オモフ</sup>ヒ、和泉國<sup>イヅミノクニ</sup>ハ尋<sup>タツ</sup>行<sup>キ</sup>キ、シノ田<sup>タノ</sup>之森<sup>ノモリ</sup>ヲ尋<sup>タツ</sup>入<sup>ケル</sup>テ見<sup>ミ</sup>レバ社壇<sup>シヤダン</sup>在<sup>アル</sup>レ之<sup>ノ</sup>、伏<sup>フク</sup>拝<sup>ハイ</sup>シテ母<sup>ハハ</sup>ノ樣<sup>ヤウ</sup>子<sup>シ</sup>ヲ析<sup>キセ</sup>誓<sup>セ</sup>スレバ、古<sup>コ</sup>老<sup>ロウ</sup>經<sup>キヤウ</sup>タル狐<sup>キツネ</sup>一<sup>ヒツ</sup>疋<sup>ト</sup>、我<sup>ガ</sup>ガ前<sup>マヘ</sup>ニ出<sup>デ</sup>來<sup>キ</sup>シ、我<sup>ガ</sup>コソ汝<sup>ニ</sup>ガ母<sup>ハハ</sup>ナレト云<sup>イハ</sup>テ失<sup>ウセ</sup>ニケリ、是<sup>コト</sup>レ即<sup>ス</sup>チ、シノ田<sup>タノ</sup>ノ明<sup>メイ</sup>神<sup>カミ</sup>ニテ御座<sup>ヨハシマス</sup>也、故<sup>ユヘ</sup>ニ清明<sup>セイメイ</sup>ハ博<sup>ハク</sup>士<sup>シ</sup>一<sup>ヒツ</sup>道<sup>ダウ</sup>自然<sup>シヤゼン</sup>智<sup>チ</sup>ニシテ天下<sup>テンカ</sup>ニ名<sup>ナ</sup>ヲ馳<sup>ハ</sup>スト云<sup>イハ</sup>云<sup>イハ</sup>、

（寛永六年版『藍簀抄』）

清明母子が居住したという「猫島」は、現在は真壁郡に属し、新治郡と隣接する。「ゆかさく山」とは極めて近距離にある。

猫島 棚古士麻 内淀村ノ東、西郷谷村ノ西ニ在リテ、其小名ヲ北新田、猫手、（中略）米御前西、清明橋、遠内、溜井西、溜井東ト云フ、

（『新編常陸国誌』卷三十二「真壁郡」）

猫島には実際に「清明橋」と称する旧跡なども残されており、延宝七年の寺社記録の中には次のような清明伝説が書き留められている。

延宝七年新鹿島大神宮之縁起

一 安部仲定当国猫島居住の尊敬節、此やしろ不倦して、清寿丸をもふ、是後に上洛して号從四位播磨守安部清明はまれを世上に発しぬ、此御神の徳用也、（明野町史資料第二十二集『近世から現代の史料 明野町の神社と寺院』、明野町史編さん委員会編、平成七年三月）

今でも猫島には清明伝説が色濃く伝えられている。代々庄屋を勤めた高松家には、清明が居住していたとさえ信じられていた。

高松さんの屋敷内に清明井戸があるんですよ。また清明橋も昔からかかっています。これは猫手（ちよつかい）というこの猫島内にあったんです。今はなくなりましたが、何でも整理の時に氏人の方に移ったらしいんです。（中

略) もう一つは家の前に晴明塚というのがあつたんですね。それは何か分からないんですが、そこから矢を射つたところ、何か今はつくば市になつたんでしょうか。あの一の矢という所に届いたという話なんです。安倍晴明は高松さんの屋敷内に住んでいたという言い伝えもあるんです。(中略) 晴明神社は昔、お乳の出ない人がその水をもらいに来て、それを飲むとお乳が出たつていわれていたね。また、病氣にもならないといわれていた。また、晴明が馬でこの地を去る時、馬がここを離れるのをいやがつて暴れ、そのひずめの後が晴明橋に残っているそうです。(明野町史資料第二十三集『明野の聞き語り』、茨城県真壁郡明野町史編さん委員会編、平成七年三月) 安倍晴明は、九尾の狐を退治したんだっけかな。昼間でも星が映る井戸があんだつてな。杉林の中に、そこへ行くのに、小さい橋があるつて言つた。それを、晴明橋つて言うんだ。今でも、あの、晴明橋つて言つて、あんだそうだよ。晴明井戸つていうのもあつたんだそうだよ。故高松市衛さんの屋敷だな。これは堀をめぐつてある家、ケヤキの木なんかが生えてたりしてね。あの、宅地内、裏の方にあるつて言つてたな。(同右)

安部晴明とその母狐にまつわる伝承は、「ゆかさく山」の山麓一帯に普及していた。

『短冊の縁』の末尾では、自害した姫君の乳母を「ゆかさく山」に祀り、稲荷と共に大切にしようと語られている。かすかながら、そこには愛子と別れねばならなかつた母狐伝承の俤を見ることができのではなからうか。

さて又、めのとが菩提のため、ゆかさく山といふ所に、一字の御堂を建て、めのとが姿を弥陀の尊様にうつし、ふだん香花をそなへ給ふ、かの稲荷の社をば、いよく社をあらため、御氏神になぞらへ給ふ、其後、姫君は花わの御館にいらせ給ひて、御子あまたまうけ給ひて、すゑはんじやうとぞうけ給はる、

(『短冊の縁』)

六

『短冊の縁』には、室町物語や民間伝承に繰り返し登場する話型が縦横に用いられている。短冊を機縁として見ぬ恋となるのは「絵姿女房」を想起させる。密かな恋ゆえに流離する主人公もしばしば活躍するところであろう。二人の男性の間で悩む女主人公は、古来、枚挙に暇がない。むしろ我々の関心を引くのは、本書の際立つた土俗性、地域性であろう。

『短冊の縁』では終始一貫、常陸国新治郡や筑波山を中心に地名や人名が設定されていた。とりわけ、本書所見の地名・人名は現茨城県新治郡の地名とほぼ一致する。この事実は、作品成立の時期を伝える重要な鍵の一つであろう。常陸国新治郡は、時代によって郡域が大きく変遷した地区であった。『短冊の縁』が「新治郡」と明記し、本文中、一々の地名が現新治郡のそれと照合可能であることを看過してはならない。

『新編常陸国誌』には郡域変更の経緯が詳細に解説されている。

文禄三年十月、石田治部少輔三成、豊臣家ノ命ヲ受テ、当国ヲ検地ス、(中略)十六郡ヲ更メ、古ニ復シテ十一郡トス、然レドモ久シク錯乱ノ境界ヲ俄ニ改定セラレシ故ニ、名ハ古ニ復ストイヘドモ、其境ニ至テハ大ニ違ヘル地多シ、(中略)方穂庄ヲ新治郡ニ属ス、古ノ筑波郡也、信太庄、東條庄ハ旧ニ准ジテ信太郡ニ復ス、山庄ヲ新治ニ属ス、古ノ筑波郡也、南野庄ヲ新治郡ニ属ス、古ノ茨城、茨城二郡ノ地也、佐谷郷ヲ新治ニ属ス、古ノ筑波也、北郡ヲ新治ニ属ス、古ノ茨城郡也、南郡、河内、滑川以南ノ地ヲ新治ニ属ス、古ノ茨城郡也、今置ク所ノ新治郡ハ、古ノ茨城、筑波二郡ノ地ニシテ、一村モ旧郡ノ地ナルハナシ、旧郡ノ地ハ悉ク西河内、西那珂、真壁、

茨城等ノ地トナルヲ以テ也、

〔新編常陸国誌〕卷五

現在の新治郡は、かつて茨城郡・筑波郡に属していた。郡域が現今のごとく「新治郡」に決定されたのは、文禄の太閤検地以後のことである。

『短冊の縁』に「新治郡の鼓が峰」と記され、各地名が新しい新治郡のそれぞれに合致する以上、本書の成立は文禄の検地以降、新たな「新治郡」の名称とその郡域が定着した後と考えられる。

『短冊の縁』の記述を通して詳細に検討するならば、本書成立の上限をさらに限定し得るのではないか。その要となるのは、信濃の入道と姫君が辿った旅路である。

二人は桜川を越え、下野国日光山、室の八島、宇都宮、上野佐野の舟橋を経て、「碓氷峠」に至った。姫君は遥かに霞む筑波山に向かつて手を合わせ、涙に暮れながら心を定めて出立する。

うすひのとうげをうちこえ給ふとひとしく、雲のうへなるあさまのたけ、是なん、あり原の中將の見やはとかめんと、ながめさせ給ふまで、おもひやられてあはれなり、かるひ沢、おひわけのしゆく、うみの、里、うへ田、さかきをうちすぎて、とくらのしゆくに入給ひなんとするに、右にあたりてなかばは雲にそびへて岩尾いわをなめらかなる所によしありげなる松の一本ありけるを、（中略）やしろの明神、ふしおがみ、ちくま川うちわたり、あれに見え侍こそ善光寺よと、おしへ申せば、御心のうちに御念仏を申させ給ふて、（中略）丹波嶋たんばしまにつき給ふ、

〔短冊の縁〕

二人は上野国境、碓氷峠を越えて「浅間嶽」「軽井沢」に至り、信濃国に入って、「追分の宿」「海野の里」「上田」「坂木」を過ぎ、「戸倉の宿」に入った。「矢代の明神」を拝み、「丹波島」に到着している。

碓氷峠から追分の宿までは東山道、即ち中山道に相当する。中山道の制定は慶長七年（一六〇二）、徳川幕府によ



つて五街道が制定されたことに始まる（『信濃史料』第十九卷所収「徳川御家道中触留書」六月二日条ほか）。

佐久郡追分宿は、中山道から北国脇往還への分岐点であった。追分宿の名称は、慶長七年六月十日付の「土屋文書」『往還日記』（『信濃史料』第十九卷所収）にも見えている。北国脇往還は北国街道・北国往還とも呼ばれ、追分宿から分かれて、小諸、小県郡田中、海野、上田、埴科郡坂木、戸倉、矢代、更級郡丹波島、水内郡善光寺、稲積、牟礼、古間、柏原、野尻の宿々を経て、越後国頸城郡に通じていた。姫君一行が歩んだ道筋は、まさしくこの道に合致する。丹波島の名称が初めて確認されるのは慶長七年（一六〇二）、

慶長七壬寅 森右近殿

信州川中島四郡検地打立帳（中略）

一 六百七拾八石四斗七舛貳合 丹波嶋村

（『信濃史料』第十九卷所収「小柳文書」）

北国脇往還に関する記録上の初見も、家康が「坂城宿」に対して下した慶長八年（一六〇三）二月二十日付の朱印状であるという（『信濃史料』第十九卷所収「宮原文書」）。

続いて慶長十六年（一六一一）九月三日には、越後高田城主の松平忠輝から伝馬宿条目が出されており（『信濃史料』第二十一卷所収「大古間共有文書」）、この頃に路次がほぼ固定したと推測される。『信濃史料』はこの伝馬宿条目について、

更級郡更北村柳島巖氏所蔵ノ「丹波嶋」宛ノ松平忠輝老臣等連署伝馬条目（中略）、異事ナキニ依リ略ス、と断っており、丹波島宿が設置されたことを裏付けている。

従って『短冊の縁』の成立は、少なくとも街道が制定された慶長七年（一六〇二）を遡ることはあり得ない。或いは、丹波島が伝馬宿に制定された慶長十六年以降と言っても良いであろう。

伝馬宿に指定された丹波島には、当然、数多の人々が往来した。また、丹波島付近の犀川には室町以来の軍事上の渡河拠点「丹波島渡」があったが、この渡も慶長十六年以降は更なる活況を呈するようになる。

しかも丹波島は、地理的には善光寺への表玄関に当たる位置を占めていた。『短冊の縁』は、入道の屋敷で養われている姫君の様子を「ほど近き善光寺へ今日の明日のとせしほどに」と描写している。「丹波島の入道」は、近世初頭の伝馬宿の制定と、善光寺信仰に支えられた有力者の一人として描かれたのではないかと思われる。

丹波島から臨む善光寺を、俳人一茶は次のように詠んだ。

丹波島より

真直<sup>まっすぐ</sup>にかすみ給ふや善光寺

〔『文政句帖』〕

## 七

姫君が志した信濃善光寺は、中世以来、女人救済の寺であった。

例えば、『平家物語』巻第十「千手前」には平重衡と千手前の悲話が載る。重衡は牡丹の花に喩えられる程の風流人であったが、源氏に囚われ、伊豆国住人狩野宗茂に預けられた。狩野介は美しく優雅な千手の前に彼の世話を命じた。二人は心を通わせるが、間もなく重衡は処刑された。千手の前は、

やがてさまをかへ、濃き墨染めにやつれ果て、信濃国善光寺におこなひすまして、彼の後世菩提をとぶらひ、わが身もつゐに往生の素懷をとげけるとぞ聞えし、

〔『平家物語』〕

また、虎御前は曾我十郎討死の報に接し、「いかなる淵河にも入らばや」と悲嘆にくれるが、出家して彼の菩提を

弔おうと思ひ直す。兄弟の母は曾我の地へ彼女を誘つた。しかし、彼女は、

もつとも御供申候て、形見にも見えまいらせたくは候へ共、これより善光寺への心ざし候、

【曾我物語】卷第十二

と断つて信濃を目指した。虎は「麻衣、紙の衾を肩にかけて諸国を修行し、信濃国の善光寺に一兩年の程、他念をまじへず、念仏申、過去聖霊、頓證菩提といのり、また都にのぼり、法然上人にあひ奉、念仏の法門をうけたまは」つたという（『曾我物語』卷第十二）。『吾妻鑑』建久四年（一一九三）六月十八日条にも、虎御前の出家と善光寺参詣が記録されている。<sup>(22)</sup>

或いは、熊谷直実の娘玉鶴姫の善光寺参詣が伝えられ、謡曲「柏崎」の狂女は、

本願誤り給はずは、今の我等が願はしき、夫の行方を白雲のたなびく山や西の空の、彼の国に迎へつつ、一つ淨土の縁となし、望みを叶へ給ふべしと、称名も鐘の音も、曉かけて燈火の、善き光ぞと仰ぐなり、南無婦命弥陀尊、願ひを叶へ給へや、

と祈り、合掌した。

『大塔物語』では、遊女たちが討死した恋人の菩提を弔うため、善光寺で出家する。

爰校小路玉菊、花寿云遊女、此日来坂西次郎結、仮寝之夢、不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>其情、立<sub>レ</sub>出大塔、尋<sub>レ</sub>彼死骸雨霽泣悲奉<sub>レ</sub>憑<sub>レ</sub>時衆、懇取納婦<sub>ニ</sub>善光寺、哀<sub>ニ</sub>墨染衣身、偏訪<sub>ニ</sub>菩提、覺<sub>ニ</sub>杜優珍重様也、

【大塔物語】

同じく、討死した常葉入道の妻女も善光寺に詣でて出家を遂げたという。

三途瀬川先立跡ヲ尋ツ、善光寺ヘコソ詣ケレ、（中略）爰蹉跎ト歎悲有様心中被<sub>レ</sub>想像<sub>ニ</sub>哀也、将泣々是ヲモ立別レ、自<sub>レ</sub>其直詣<sub>ニ</sub>善光寺、伏<sub>ニ</sub>拝生身弥陀、則成<sub>ニ</sub>妻戸時衆、昼夜六時不<sub>レ</sub>怠常葉入道父子三人後生善所頓證菩提廻

向被<sup>レ</sup>訪<sup>レ</sup>龜社難<sup>レ</sup>有様、

〔大塔物語〕

さればこそ、『短冊の縁』の姫君も、

めのがつね<sup>く</sup>語りしは、信濃の国善光寺<sup>ぜんくわうじ</sup>には、比丘尼たちの多くして、女の世をいとはんにはこれに過ぎたる<sup>ところ</sup>なしと言ひけん物を、

〔短冊の縁〕

と思に至つたのであった。

けれども、実際の善光寺は歴史の荒波に翻弄<sup>(23)</sup>され続けた。度重なる炎上に加え、永禄元年（一五五八）には善光寺如来が武田信玄の手で甲斐国に移された。信玄は新善光寺を建立し、元龜三年（一五七二）に大本願鏡空智浄尼を請じて開山とした。

天正十年（一五八二）に武田氏が滅亡すると、本尊は織田信長によって美濃に移された。その後、本尊は尾張甚目寺、遠江鴨江寺を経て再び甲斐国に至った。

慶長元年（一五九六）九月、豊臣秀吉の夢枕に善光寺如来が立つ。

甲斐国善光寺如来、一七夜以来、夢ニ被成御覽候も、か様之儀被仰出候事、如何と思召、此中雖被成御遠慮候、既昨夜者、現之様ニ影向候て、都へ被相移、阿弥陀峯と申山之麓ニ有之度と示現候、

〔高野山文書〕所収「統宝簡集」三十八

翌二年、本尊は壮麗な行列と共に京都方広寺へ移され、見物群を成した。『寒川入道筆記』にも伝えて言う。

一とせ信濃善光寺如来御在京とて、御のほりのとき、則、本田善光御供也、是を粟田口にて雄長老御見物なされ、とりあへず、

つミをきる弥陀のつるぎやならん

粟田口より出るよしミツ

(新本大系第一卷所収『寒川入道筆記』)

権力者のもとを転々とした本尊が信濃善光寺に戻ったのは、慶長三年（一五九八）、大本願智慶尼の奏請によるものであった。同年八月十七日、本尊は実に四十余年ぶりに信濃善光寺に遷座、翌日十八日には太閤秀吉が逝去した。

八月十六日、善光寺如来俄下向、町伝に信州本善光寺へ送<sub>レ</sub>之、路次中にて脇仏は散々の体也、此善光寺如来上り給て後、太閤無<sub>レ</sub>程病氣之間、不吉之兆とて如<sub>レ</sub>斯、  
〔当代記〕卷三

それから三年後の慶長六年（一六〇一）七月二十七日、徳川家康は善光寺に寺領一千石を寄進した（『信濃資料』第十九卷所収「善光寺文書」）。本尊の遷座に加えて、広大な朱印地を得た善光寺の隆盛ぶりは往時に勝るものがあつたろう。

善光寺への本尊遷座と朱印地の授受、五街道及び北国脇往還の整備、常陸国の郡域制定、これらはその時期をほぼ一にしている。

『短冊の縁』の作者は物語を構成するに際し、室町以来の伝承や常套的手法を駆使して筆を進めた。何よりも、地名や人名が用意周到に配されている点、極めて特徴的である。林氏頼の館は現八郷町のほぼ中央に位置し、館を取り囲むように、登場人物名と合致する地名、林・片野・小倉・須釜・細谷が存在していた。その一方、失踪した姫君の搜索は、八郷町域と他地域との接する場で行われており、稲荷の化身が現じたのも八郷町の境界線上であった。事件が起こり得る場所として、常に八郷町周縁の地が選ばれていると言つて良い。

恐らく、作者は故事来歴にも精通した、常陸国近辺に在住の文字ある人物だったのであろう。その人も名も、もとより知るすべはないのだが。

〔注〕

(1) 天理図書館蔵、写本一冊。江戸中期の書写と思しく、題簽に「たんさくのゑん」とある。本文の引用は「室町時代物語大成」によるが、適宜、濁点を施し、漢字を充てゐるなどした箇所がある。なお、各地名等は注末の地図を参照。

(2) 姫君自害の場面は、

やおら、すべり起きさせ給ふて、御肌には紅の單なるに、白き衣の少しなへたるを引き重ね、左の御手には法花経の五の巻、右の御手には守り刀を持たせ給ふて、御心のうちにて御経あそばし、

〔短冊の縁〕

とあり、「南無」となる御声もろともに、「口に劍の先を含む。しかし、罪深い女人の身である上に、このような方法で命を絶てば修羅道に落ちるであろうと思ひとどまる。姫君が法華経五の巻を手自害を図るのは、この巻が女人救済の經典であつたからである。法華経は「女人のたすかる法華経」(「常盤物語」)としても信仰された。『さよ姫』『壺坂物語』『法妙童子』『興福寺の由来物語』等の女主人公は、法華経読誦の功力によつて大蛇の難から救われる。特に『法華経』巻第五「提婆達多品第十二」には、「未來世の中に、若し善男子、善女人ありて、妙法華経の提婆達多品を聞き、淨心に信敬して疑惑を生ぜざれば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして、十方の仏前に生れ、所生の処には、常に此経を聞かん」と言い、竜女成仏を説く。『梁塵秘抄』は「凡す女人一度も、この品誦する声聞けば、蓮に上る中夜まで、女人永く離れなむ」(巻第二・法華経廿八品歌「提婆品」)と讃嘆した。『お伽草子事典』『經典』の項目参照(東京堂出版、二〇〇二年)。

(3) 本稿では『新編常陸国誌』は、宮崎慶一郎発行、昭和四十四年復刊本を引用する。必要に応じ、私に傍線を施した。同書巻百九「文苑」は「桜川」の項を立て、

磯部明神ノ社地ヨリ出、杜木ハ勿論、一村ノ林スベテ桜木ナリ、毎春落花水面ニ浮ブラ以テ名ヅク、(中略)又享保中、江戸ノ飛鳥山ニモコノ社地ノ桜ヲ植タマフト云ヘリ、(中略)又、桜川、セツノ白浪、シゲケレバ カスミウナガス、志太ノ浮島

〔新編常陸国誌〕巻百九「文苑」桜川

〔按ルニコノ歌、古ニ所見ナシ、作者ノヨミ入シモノニヤ〕と説く。「桜川瀬々の白波しげければ 霞うながす志太の浮島」は同書巻百十一「信太浮島」にも「夫木集」「詠人しらず」として載る。この歌は謡曲「桜川」に紀貫之作として所見、姫君の詠歌と趣を同じくする。桜川については小著「一乗拾玉抄の研究」(臨川書店、平成十年)の第三章「一乗拾玉抄」と天台宗談義所「第一節」「一乗拾玉抄」と曙光山月山寺」においても言及した。「新編常陸国誌」はしばしば中世「法華経」注釈書の一つ「法華経鷲林拾葉鈔」(永正九年成立)を引用しており、『法華経鷲林拾葉鈔』受容の側面を伝える資料としても興味深い。中世「法華経」注釈書については前掲小著ほか参照。

(4) 『八郷町誌』(八郷町編さん委員会編、八郷町長吉田次郎発行、昭和四十五年) など参照。同書第四章第十六節「旧跡と名勝」は「柿岡城址」について次のように解説する。

柿岡の西南館地内の高台にある。(中略) 源頼朝が鎌倉に幕府を開いたころ、常陸守護職に補せられた八田知家が、その子小田時知(時家ともいう)をここにおいたといわれ、それからのち、代々柿岡氏を称え、東南約三キロの片野城とともに、この地方を支配していた。構内の東南にある諏訪神社は時知が築城の時、城の守護として創祀されたといわれ、いまもその境内に七〇〇年の歴史を語る大榎がある。

(「八郷町誌」)

この城は天正年間、梶原資晴の居城となり、また同族の真壁氏が入城、佐竹氏の勢力範囲内に置かれた。佐竹氏が秋田に移封となつてからは、九州柳川・立花氏・稲葉氏など転々と城主は変わり、後には徳川の直領として明治維新まで支配が続いた。なお、榎については柳田國男「争ひの樹と榎樹」(定本柳田國男集第一巻)、拙稿「谷中道―『しのばずが池物語』のこと―」(岩波書店『文学』二〇〇一年五月月号) 参照。

(5) 『八郷町誌』には以下のように記載されている。

八郷の中央標高一三五米の富士山(鼓ヶ峰ともいう)の北麓にあたる柿岡字並木の広場にある。(中略) 広々とした構内からは筑波の翠峰が眺められ、芝生を点綴する緑の松と、敷地をめぐる桜の太木が白亜の建物とマッチして、近代的な景観を示している。

(第四章第十六節「柿岡地磁気観測所」)

(6) 鬼越山については後出。石淵に関して『八郷町誌』は、板敷山を源として高浜入りに注ぐ全長約二六軒の恋瀬川は、だいたいその半分が八郷地区内を流れているが、その中に位置する川又東南の突端と、鬼越山の裾が相接するところに石淵(イシブチ)という地名がある。(中略) 往古は、それから上は一面の大沼、(中略)、沼は、鼓ヶ峰の裾に広がり、西は川又裏から、北は前島辺におよんだ。

(「八郷町誌」第四章第十二節「大沼変じて良田となる」)

と伝える。「太田川」のほか「ほそうち川」は『新編常陸国誌』「小幡」の項に、

吉生村ノ南二位シテ、筑波山ノ東麓ニアリ、其小名ヲ十三塚、湯袋、中山、細内、堀之内、上宿、中宿、下宿、横町、稲子、里坪、関下ト云フ、

(卷三十「新治郡」)

と見える「細内」に関わるか。地図18・19参照。

(7) 『鎌倉大草紙』巻上には、男体山城をめぐる一連の騒動が記録されている。至徳三年(一三八六)五月、小山義政の子息、若

犬丸が謀反、嘉慶元年（一三八七）五月には、彼が小田入道惠尊の元に匿われているという情報が入った。七月十九日、上杉朝宗軍は常陸小田の城を攻略した。小田軍は、

小田を落て、男体山に楯こもる、此城高山にて力攻に難落、十一月二十四日より相戦といへども、勝負もなし、

〔鎌倉大草紙〕卷上

翌年五月十七日未明の戦闘に至つて事態は収束に向かい、小田家来百余人は城中から火を放つて焼き払い切腹、一族は没落したという。『喜連川判鑑』翌嘉慶元年（一三八七）三月条にも同合戦の記事が見える。

嘉慶元 三月 小田五郎ガ一族等、野心ヲ起シ穴戸男体城ニ楯籠ル由、告来ル、十一月、上杉中務大輔朝宗入道禪助ヲ大将トシテ、穴戸へ被向、

二 五月 穴戸ノ城、糧尽テ、小田五郎ヲ初トシテ一族皆滅亡、

〔喜連川判鑑〕

『頼印大僧正行状絵詞』第十もこの合戦に言及している。即ち、至徳四年（一三八七）五月の頃、小山若犬丸が野心を持ち、小田惠尊等と通じた。同年七月十九日、上杉朝宗が小田へ出陣すると、一党は「男体城」に立て籠もつた。上杉は男体山脚に布陣するが、「件ノ城ハ自然ト要害ニシテ、人ノ往来モタヤスカラザル間」、苦戦を強いられたという。

（8）『八郷町誌』は以下のように「有明の松」説話を紹介している。

瓦谷の宿場を出て、北側の田圃を越し、山道を行くとすぐ有明中学校、その台地を下りたところの道わきに有明の松がある。樹齢は明らかでないが直径一米あまりもある堂々たる直幹、四方に張つた大枝は常に天風に吟じ、行き来の人を目標ともなる見事な一本松である。この辺からすぐ東に見える難台城は、標高五五〇米ほどの岩石重り合う険しい山であるが、昔、この山をめぐつて合戦があつた。（中略）城危しと見たその夜、城主は籠城していた婦女子を城から落した。五、六名の従者に守られた婦女子は、敵の包囲する東側を避け、山道を這い上つて頂上にたどりつき、それから闇の中を西に降りた、敵の追撃が恐ろしく、夜が明けるまでに里に下りたいの一心で、峻しい山の降り道を、藤蔓にすがり、薄につかまり、手足を血だらけにして、ようやく平地にたどりつき夜明けを迎えた。敵の目からのがれ、やっと安心し、道添にある大松の下で一休みした時、夜明の空がさわやかであつたので、自分等の行先も、この松にあやかり、長くたくましかれとの念願から有明の松と名づけてここを立ち去つたといわれる。

（9）『八郷町誌』は風返し峠について、

筑波山の東麓十三塚からの登山口をのぼりつめたところ。標高約四〇〇米、新治・筑波の郡界である。四方開き西南はるか



関東平野を渡る群山の上に富士の霊峰が眺められ、眼をあげれば筑波の双峰は指呼のうち、一〇〇〇里を亘る風がここに集まって全山の緑をゆるがす、まさに風返し勝景である。

〔八郷町誌〕第四章第十六節「風返し峠」

と説明し、また、爺ヶ峰伝承は永禄以前にあったのではないかと推測している。

嬭ヶ峰は、小幡の赤滝から登って筑波下の六所方面に越える峠の道傍にあり、それより南への峠道を約五〇〇米ほど離れたところに爺ヶ峰がある。(中略) この爺嬭が殺された年代を、天明の頃とした書物もあるが、よく調べて見ると、永禄一二年、このすぐ下の手這山付近で合戦があった時の記録に、小田軍は地藏平に陣をとり、その文がある。それから考えれば、その時すでに、爺ヶ峰地藏が立つて居たのであろうから、永禄より前に相違あるまい。

〔同書「爺ヶ峰と嬭ヶ峰」〕

老夫婦が越えたという「菖蒲沢」は実在の地名である。地図6参照。

菖蒲沢 志夜宇夫左波 東ハ辻村、西ハ小野越村裏山、南ハ柴内村権現山、北ハ青柳村竜神峠二界ス、

〔新編常陸国誌〕卷三十「新治郡」

なお、新治郡宍戸村・安食村の周辺にも「風返」の地名がある。

宍倉 志々久良 東南ハ安食、上下軽部、成井、根本、三ツ木、大堤諸村ニ接シ、西北ハ菅谷、白鳥、神立、角木、三村、石川、井関等ノ村ニ隣リテ東北ノ一隅ハ霞浦ニ突出ス、(中略) 宍倉ノ称ハ、モト此辺ノ大名ナリ、故ニ今ニ至リテ、田伏、柏崎、三ツ木、上軽部、安食、宍倉、井関、石川、八村ラスベテ宍倉領ト呼ベリ、〔新編常陸国誌〕卷三十一「新治郡」  
安食 阿牟士伎 東ハ柏崎、南ハ岩坪、下軽部二村、西ハ宍倉村ニ隣リ、北ハ霞浦ニ臨ム、其小名ヲ風返、平、高加津、北之坊、塙前、小津、田子内、中道、宮下ト云フ、

〔同右〕

霞ヶ浦と菱木川に挟まれたこの高台には「風返し古墳群」があり、中でも著名なのは「稻荷山古墳」であつた。

(10) 地図10・11参照。なお、鹿島郡林村に林氏が実在しているが〔八郷町誌〕、今はこの人物名が新治郡八郷町の郷名に一致することに注目しておきたい。〔新編常陸国誌〕が解説する通り、下林は「鬼越山」と境を接している。

下林 之毛婆夜志 東北ハ原野ヲ以テ石岡、山崎、烏瓜三村ニ接シ、東南ハ鬼越山逆川ヲ限リテ、根小屋村ニ界ヒ、西ハ恋瀬川ヲ隔テ、金指村ニ対シ、西北ハ田畝ヲ以テ上林村ニ隣ル、

〔卷三十「新治郡」〕

また、片野の地も「鬼越山」を東の境としていた。

根小屋 柵呉夜 東ハ鬼越山ヲ限リ、西ハ向町村ニ界ヒシ、南ハ山岳ヲ以テ染屋、高倉二村ニ限リ、北ハ下林村ニ接ス、(中略) 此村旧ハ向町村ト合シテ片野村ト云フ、

〔卷三十「新治郡」〕

片野城主は後に「鬼越山麓」に移動したともいう（『八郷町誌』）。片野には「片野排枹ばやし」という芸能も伝わっており（『八郷町誌』）、獅子舞・彦徳舞、おかめのほか、「狐踊」が登場する。この芸能は『新編常陸国誌』にも紹介された。また、新治郡内には「稻荷川」と呼ばれる川も流れていた。

瓦谷 加波良夜 東ハ山崎村、西ハ宇治会村、南ハ片岡村ニ隣り、北ハ茨城郡ノ界ニ接ス、（中略）河流ニアリ、一ヲ水口川ト云ヒ、江戸壁ヨリ発シ、曲流シテ恋瀬川ニ入り、一ヲ稻荷川ト云ヒ、南流シテ水口川ニ会ス、

（『新編常陸国誌』巻三十「新治郡」）

（11）清原宣賢『毛詩抄』巻之十二・小雅・節南山之什は、「我亀既厭 不我告猶 謀夫孔多 是用不集 發言盈庭 誰敢執其咎 如匪行邁謀 是用不得于道」という句について、以下のように注する（小川環樹・木田章義校訂『毛詩抄』、岩波書店、一九九六年）。

我亀 是は今小人が道徳をば本にせいで、占やなんどをする事を本にする其を云ぞ、占をば亀をも著をも氣にあわぬと云て、しなをしはせぬ物ぞ、今の小人はしなをすぞ、去程に神霊もこなたを、あなどつて亀トがあいたぞ、又義には、しげうすれば、こちらから亀をあなどるにもなるぞ、亀も吉に凶を告げ、凶に吉をつけてあわぬぞ、（中略）著の占は一度するがよい、二度するは悪と云が、其義は悪いぞ、其はちがいで、申たけれども略するぞ、

『短冊の縁』の姫君は、全身全霊を傾けてただ一度の著を取り、将来の幸運を引き当てる。

（12）改訂史籍集覧第十六冊所収。

（13）『新編常陸国誌』巻百二十「草苔」の著草の項にいう。

著草 筑波村民家ノ東ニ原アリ、夫女原ト云、夫女石アルユヘニ名トセルナリ（詳筑波山ノ下ニ出ヅ）、其東ニ岳アリ、亀岳ト云フ、山ノ形亀甲ニ似タルヲ以テ名トセリ、コノ岳著ノ名産ナリ、一株百茎ノ下ニハ、必亀アリテ負ト云リ、亀岳ノ名亦合ヘリ、然レドモ一株百茎ハ甚マレニシテ得難シ、丹波ノ亀山トコノ山トハ、日本著ノ名産ニテ、易家者流ノ信用スル所ナリ、土人毎年七月七日ノ夜、是ヲ探テ夫女石ノ上ニ晒シ用ユ、蓋陰陽和合ノ理アルヲ以テナリ、雍州府志云、著木、俗称著萩、是又萩一種也、所々出、然ト筵家嵯峨亀山之産専用之、近世又伏見城山所生者採之、是狼谷誤依称大亀谷也、筑波山のお座替わりについては『新編常陸国誌』にも言及がある。

（14）筑波山神二座 補、筑波郡筑波山ノ絶頂ニアリ、山ニ二峯アリ、其南ヲ陽峯ト云ヒ、其北ヲ陰峯ト云（二十八社考）、（中略）筑波山神二座 補、筑波郡筑波山ノ絶頂ニアリ、俗ニ御座替ト云是ナリ（筑波社記）、（『新編常陸国誌』巻六十六「筑波郡二座」）

九月朔日には「筑波講」も行われた。参詣できない場合は代参を立てて、家内安全と豊作を祈る。十一月朔日のお座替わりの日にする部落もある。十一月朔日は親神が上に登り、子神が下る祭りである。

〔八郷町誌〕

また、筑波山内には奇石が多く存在していた。『筑波山名跡志』には項目として立てられているだけでも、「神輿石」「牛石」「立身石」「翁石」「大仏石」「大黒石」「北斗石」「影向石」「国割石」「叶石」「杉石」などがある。『短冊の縁』に言う「阿弥陀石」は「大仏石」を指すか。

○大仏石 此所九折大難所也、鉄の鎖を掛けて往来する、山を下る時は右の方に高さ十五六丈の大石有り、脇より仰ぎ見れば座像の仏形、前に向へば、常の岩山也、此道の辺に何者が狂歌して、この所大仏石と申なり顔ふりあげて上を見給へと、信濃のは、ききに事になり、

〔筑波山名跡志〕

なお、神主の語った「なみつく石」については後出。

(15) 中村禎里『狐の日本史』古代・中世篇（日本エディタースクール出版部、二〇〇一年）、同近世・近代篇（日本エディタースクール出版部、二〇〇三年）、雨谷昭『常陸史の研究』（筑波書林、平成五年）など参照。

(16) 温湯が湧き出たという「ゆかさく山」と、その付近に「鼓が峰」があることは、次の著名な西行説話をも想起させる。

不動明王

熊出村みの手が滝湯の沢に立つ。このみの手が滝はむかし八大竜王の御鎮座也。三十三間余、幅二間余もあらん。この奥に湯殿山権現御鎮座の旧跡あり。近き所なればとて是より今の霊場へ飛ばせたまいしとかや、諸人信仰す。詣るに三七日の潔斎にてかのしやうせつに至る。この辺につつまけ滝という名所有り、伝え聞くに西行法師来たりてかくならん、

音に聞くつつまが滝を来て見れば只山川の鳴瀬なりけり

と詠じたり。しばらく休らいたる所に、いつともなく山賤と覚しき者来て曰く、御僧の口つさみ給いし歌、心にかはわず、わらわが歌聞き給えとて、

音に聞くつつまが滝をうちみればただ山沢のなる瀬なりけり

かく詠み給いてこそとありければ、西行聞きもあえず、かかるいやしき山賤の歌よみ給いしやさしさよ、御身はいかなる人ぞと申さる。翁いう、往古より御滝に鎮座し和光の塵にまじわりて衆度の為にかりに和僧にまみえたり、我こそは不動明王、と申すもはてぬに光明をはなち明王さつとあらわれ滝壺に入らせ給う。とみて夢さめぬ。西行大いにおどろき、且よろこび感激肝にめいじ、諸仏我を守護し給う是歌の徳ならん、といよいよ執行に心は諸国行脚の僧となりしかや。即ち堂を建

て、不動を勧請なしたてまつる。

(朝日村史編さん委員会『朝日村史』上巻、昭和五十五年)

西行が鼓の滝をめぐる秀歌を詠み、歌道への思いをいよいよ深くしたという説話は、謡曲「鼓の滝」にその原型を見ることが出来る。花部英雄「呪歌と説話」歌・呪い・憑き物の世界―(三弥井書店、平成十年)・小林幸夫「鼓の秀句―西行の歌修行譚―」(東海学園国語国文)第五十八号、平成十二年十二月)など参照。

謡曲「鼓の滝」は有馬温泉にある「鼓の滝」に因む曲である。勅使が鼓の滝を訪れると、一人の山賤に出会う。山賤は「此あたりをば何と申す在所にて候ぞ」と下問され、「此処をば津の国にとりても鼓の山と申して、めでたき在所とこそ申し候へ」と答え、「国の名所はあまさかる、鄙の都より古歌にもよまれたる、名所は取り分けめでたかるべし。されば歌にも、津の国の鼓の山のうちはへて たのしき御代にあふぞうれしきとあり」と言う。勅使は喜び、

音にきく鼓の滝を来て見れば実にも面白き滝なりけり

と詠じた。山賤は「あらうたてや。津の国の鼓の滝を来て見ればとは、御言葉とも覚えぬ物かな」と難じ、

古き歌人の言葉にも、音にきく鼓の滝を打ち見れば、くく、たゝ山河のなるにぞありけると、さしも詠みし言の葉の跡なれや、此山の嵐も雪も落ちくるや、鼓の滝も花の滝も絲をそへて白波の、あら面白のけしきやな、くく、

と歌う。勅使は花にも名残が惜しまれ、鼓の滝に時を忘れた。この山賤は、実は「山河を守るなる山神茲に現れて、舞楽を調ぶる鼓の、瀧祭りの老人とは此翁」であった。翁は花をかざし、浪を踏んで、滝壺に入って行った。

瀧の響きも有明の、月の夜神楽、花の粧ひ、瞋意を驚かす夜神楽の花、落つや滝浪も、とうくとうつなり、くく。鼓の瀧、(中略)嶺の松風又谷の響き、声声落ちそひ、かざしは空の花笠、春きにけりな小忘の袖、手風足拍子の鼓の瀧に、花の鼓風をさまる御代ぞめでたき、くく

「音にきく」の一首は『扇の草紙』にも引かれるなど、人口に膾炙した秀句であった。

「鼓の滝」は有馬温泉に近い「鼓の滝」が舞台であった。先掲『朝日村史』の例もやはり「熊出村みの手が滝湯の沢」「湯殿山権現御鎮座の旧跡」にまつわる説話である。温泉涌出の地は自然奇岩や滝など多く、その流水を鼓の音に聞きなしたものであろうが、常陸国新治郡においても「湯作山」と「鼓が峰」が共に存在する点は興味を引く。『新編常陸国誌』巻百十三「玉簾寺」には「有釈一片之流、鳴鼓以礼無量寿仏」とあり、「湯殿山天権現」の伝承を伝えている。

(17) 梶原正昭訳注『将門記』(平凡社東洋文庫、一九七五年)、赤城宗徳『将門地誌』(昭和四十七年、毎日新聞社)など参照。

(18) 城を守る稲荷や、築城の際に狐が縄引きをして適地を教えたという伝承は、上野国館林の「稲荷新左衛門」や、出雲松江の

城山稲荷など、各地に伝わっている。拙稿「稲荷新左衛門のこと」(『国文学研究資料館紀要』第二十七号、平成十三年三月)、島田成矩「出雲国松江藩の稲荷信仰」(一)(二)、『朱』十二号・十三号、一九七一年)、同「松江城山稲荷の式年神幸祭」(『朱』第三十号、昭和六十一年六月)、同「増補松江城物語」(山陰中央新報社、平成十一年)など参照。

(19) 弁才天信仰については、前掲小著の第五章第二節「岩間の歌」においても若干言及した。また、大森恵子「稲荷信仰と宗教民俗」(岩田書院、一九九四年)など参照。

(20) 「稲荷大社由緒記集成」信仰著作編(伏見稲荷大社、昭和三十二年)所収。

(21) 渡辺守邦「晴明伝承の展開——『安倍清明物語』を軸として——」(『国語と国文学』五十八巻十一号、一九八一年)、同「清明伝承の成立」(『国語と国文学』六十一巻二号、一九八四年)、同「『簞篋抄』以前」(村山修一他編『陰陽道叢書』2中世、名著出版、一九九三年)、盛田嘉徳「中生賤民と雑芸能の研究」(雄山閣、一九七四年)、日本古典偽書叢刊第三巻「兵法秘術一卷書 簞篋内伝金烏玉兎集 職人由来書」(現代思潮新社、二〇〇四年)、油原長武「女化の狐伝説」(『龍ヶ崎の口承文芸』Ⅱ、龍ヶ崎歴史民俗資料館、一九九七年)など参照。

(22) 「吾妻鑑」建久四年六月十八日条には、

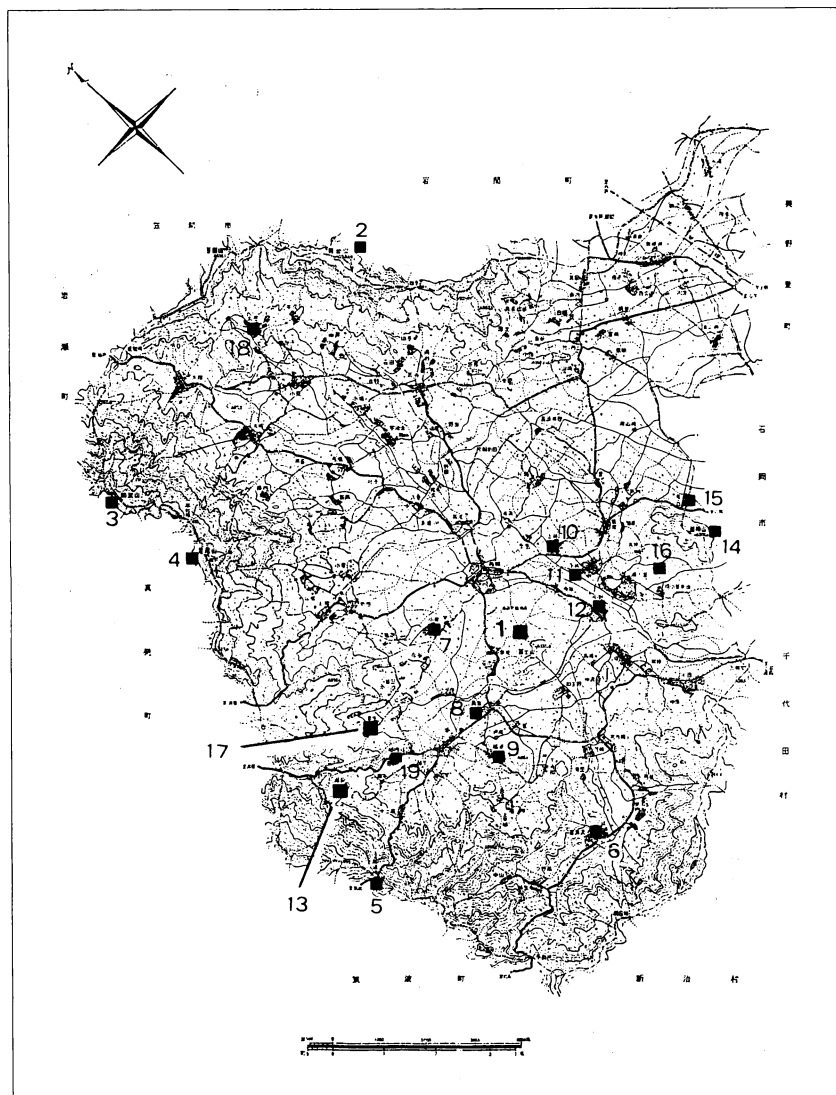
十八日癸丑。故曾我十郎妾 大磯虎。雖不除髪 着黒衣袈裟。迎亡夫三七日忌辰。於箱根山別当行実坊修仏事。捧和字諷誦文。引葦毛馬一疋。為唱導施物等。件馬者。祐成最後所与虎也。則今日遂出家。赴信濃国善光寺。時年十九歳也。見聞縑素莫不拭悲淚云々。

(23) 善光寺史研究会編『善光寺史研究』(民友社、大正十一年)・坂井衡平『善光寺史』(東京美術、昭和四十四年)・『長野縣町村誌』(昭和十一年)・小林計一郎著『長野市史考』(吉川弘文館、昭和四十四年)ほか参照。なお、善光寺と号する寺院は新治郡内にも存在しており、太田郷には新善光寺と称する一寺が建立され、崇敬を集めていた。

善光寺 「真言宗、瓦谷雲照寺末、月光山恵光院ト号ス」亦堂山ニアリ、朱印地二十石、文亀元年ノ創立ナリト云ヘリ、

(『新編常陸国誌』巻三十「新治郡」)

八郷町と『短冊の縁』  
 (『八郷町誌』所載の地図を基に作成)



1. 鼓が峰 (富士山)    2. 難台山    3. 加波山    4. 足尾山    5. 風返峠    6. 菖蒲沢  
 7. 小倉    8. 須釜    9. 細谷    10. 上林    11. 下林    12. 片野    13. 弓袋 (湯作) 山  
 14. 龍神山    15. 竜ノ口    16. 鬼越山    17. 吉生    18. 太田    19. 細内